

平成20年度

市原市内遺跡発掘調査報告

こおりもと
郡本遺跡群（第8・10・11次）

しいづむかいばら
椎津向原遺跡

さんしん
山新遺跡（第5地点）

やまき いちみち
山木遺跡群市道地区

2009

市原市教育委員会

序 文

千葉県市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、温暖な気候と豊かな自然環境に恵まれております。そのため、有史以来多くの人々の生活がこの地で営まれ、郷土の歴史が育まれてきました。国指定史跡の上総国分寺跡や国分尼寺跡、「王賜」銘鉄剣などに代表される文化遺産は、これら先人の足跡の一端を今に伝えています。

本市は、昭和30年代後半から石油化学を中心とする企業が東京湾の埋立地へ進出してきたことにより、それまで農業・漁業を中心としてきた経済構造は大きく変化し、人口の大幅な増加と都市化の進展が急速に進んできました。これに伴い、都市基盤の整備は官民間わらず行われてきました。このような中、先人達の残した貴重な文化財を保護・保存するために、開発等で歴史的な記録が消失しないよう各種の調査を実施しています。

本報告書は、平成20年度に国及び県の補助をうけて実施した、住宅造成などに伴う遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。本書が、学術資料としてはもとより、多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願っています。

最後に、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまでご指導ならびにご協力いただきました文化庁記念物課、千葉県教育庁文化財課をはじめ関係諸機関各位に、心より御礼申し上げます。

平成21年3月

市原市教育委員会
教育長 山崎 正夫

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて、市原市教育委員会が主体となり実施した、市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業・報告書刊行は、市原市教育委員会生涯学習部ふるさと文化課埋蔵文化財調査センターが実施した。
- 3 本報告書所収の調査は下記の通りであり、所在地などの諸情報は巻末の報告書抄録に記載した。
 - (1) 郡本遺跡群 第8次（調査コード セ429） 確認調査 34㎡／341㎡
調査期間：平成19年12月17日～12月20日 調査担当：小川浩一
 - (2) 椎津向原遺跡（調査コード セ433） 確認調査 448㎡／4,477.44㎡
調査期間：平成20年5月26日～6月13日 調査担当：牧野光隆
 - (3) 山新遺跡 第5地点（調査コード セ438） 確認調査 27㎡／268.91㎡
調査期間：平成20年7月22日～7月25日 調査担当：牧野光隆
 - (4) 山木遺跡群市道地区（調査コード セ439） 確認調査 29㎡／282.99㎡・本調査 7㎡
調査期間：平成20年7月29日～8月4日 調査担当：牧野光隆
 - (5) 郡本遺跡群 第10次（調査コード セ443） 確認調査 26㎡／253㎡
調査期間：平成20年11月27日～12月4日 調査担当：牧野光隆
 - (6) 郡本遺跡群 第11次（調査コード セ444） 確認調査 79㎡／789.3㎡
調査期間：平成20年12月5日～12月25日 調査担当：高橋康男
- 4 本書の編集・執筆は、牧野光隆が担当した。
- 5 郡本遺跡群第10・11次の土坑内貝層の分析及び原稿は忍澤成視が、中世遺物の分類は桜井敦史が行った。
- 6 調査に際しては、基準点測量を実施していない。そのため、図中に示す座標値（平面直角座標第IX系・日本測地系）及び北方位は地形図等から求めたものであり、厳密なものではない。また、各遺跡全体図中に1点のみ世界測地系変換座標（TKY2JGD ver.1.3.79による）を記した。水準については、近隣の既知点より求めて使用した。

本文目次

1 調査遺跡の位置	1	5 椎津向原遺跡	13
2 郡本遺跡群 第8次	2	6 山新遺跡 第5地点	20
3 郡本遺跡群 第10次	5	7 山木遺跡群市道地区	22
4 郡本遺跡群 第11次	8	8 出土遺物観察表	29

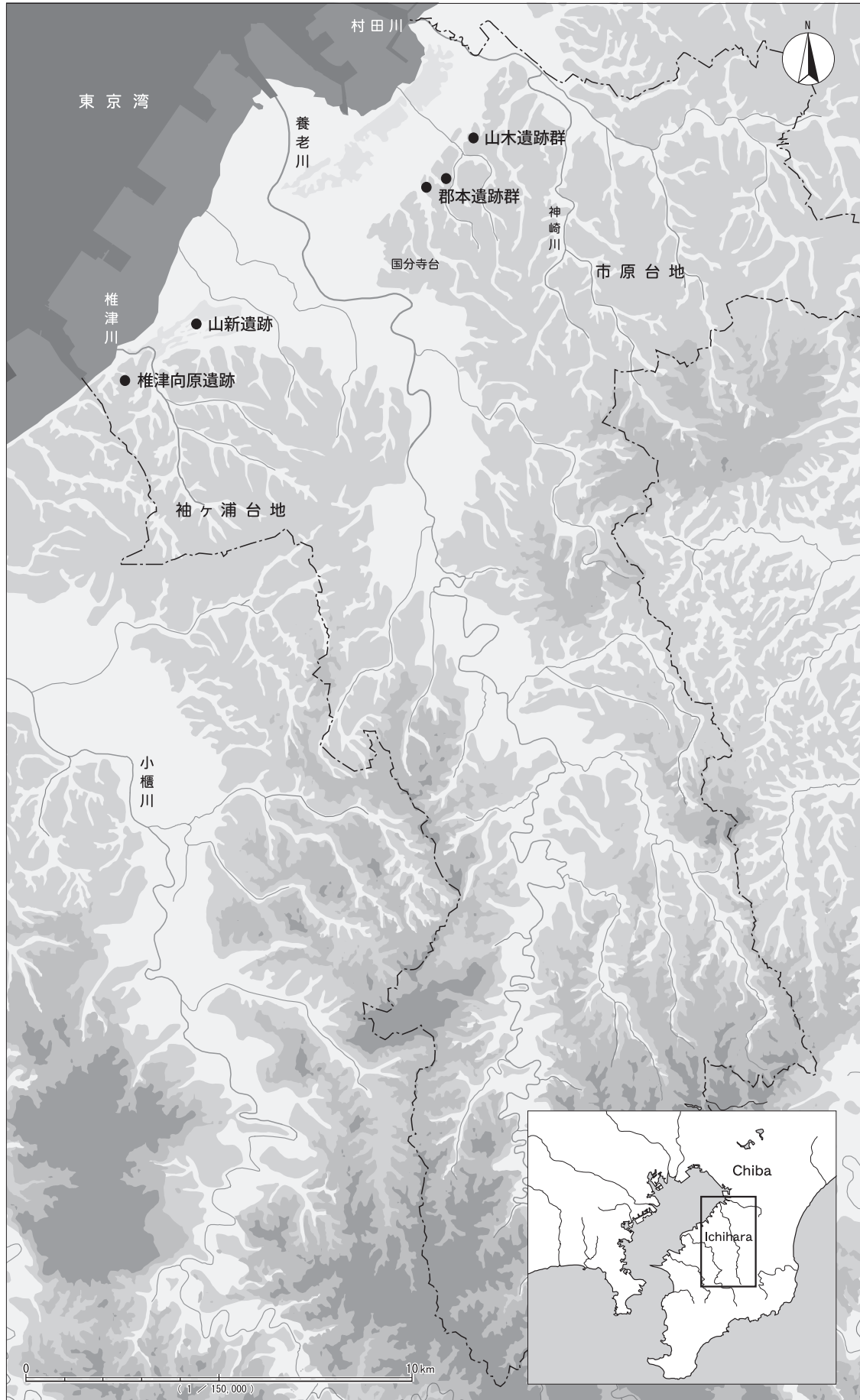
挿図目次

第1図 調査遺跡位置図	1	第18図 山新遺跡（第5地点）全体図、 1・2トレンチ断面図、出土遺物	21
第2図 郡本遺跡群周辺地形図	2	第19図 山木遺跡群周辺地形図	22
第3図 郡本遺跡群（第8次）全体図、 1トレンチ実測図・出土遺物	3	第20図 山木遺跡群市道地区 全体図	23
第4図 1・3トレンチ出土遺物、 4トレンチ実測図・出土遺物	4	第21図 1トレンチ実測図	24
第5図 郡本遺跡群（第10次）全体図	5	第22図 1トレンチ出土遺物	25
第6図 1トレンチ実測図・出土遺物	6	第23図 1トレンチ出土遺物、 2・4トレンチ実測図及び出土遺物	27
第7図 2トレンチ実測図・出土遺物	7	第24図 3トレンチ実測図・出土遺物	28
第8図 郡本遺跡群（第11次）全体図、 1トレンチ実測図・出土遺物、 2トレンチ実測図	9		
第9図 2トレンチ出土遺物、3トレンチ実測図、 4トレンチ実測図・出土遺物	10		
第10図 6・10トレンチ実測図及び出土遺物	12		
第11図 椎津向原遺跡周辺地形図	13		
第12図 椎津向原遺跡 全体図	14		
第13図 2・3トレンチ実測図及び出土遺物	15		
第14図 4・7トレンチ実測図及び出土遺物、 5・6トレンチ出土遺物	16		
第15図 6トレンチ実測図・出土遺物	18		
第16図 8・10トレンチ実測図及び出土遺物	19		
第17図 山新遺跡周辺地形図	20		

図版目次

図版1 郡本遺跡群（第8・10次）	
図版2 郡本遺跡群（第10・11次）	
図版3 郡本遺跡群（第11次）、椎津向原遺跡	
図版4 椎津向原遺跡、山新遺跡（第5地点）	
図版5 山木遺跡群市道地区	
図版6 郡本遺跡群・椎津向原遺跡・山木遺跡群 出 土遺物	
図版7 山木遺跡群・郡本遺跡群（第8・10次）出土 遺物	
図版8 郡本遺跡群（第11次）出土遺物	
図版9 椎津向原遺跡・山新遺跡（第5地点）・山木遺 跡群 出土遺物	
図版10 山木遺跡群市道地区 出土遺物	

1 調査遺跡の位置



第1図 調査遺跡位置図

2 郡本遺跡群（第8次）（遺構：図版1／出土遺物：図版6・7）

遺跡の位置 遺跡は、東京湾の旧海岸線から南東に約2.5km内陸の、標高25mほどの通称「市原台地」上にある。南北1.35km、東西0.83kmの広大なエリアを指し示すため、「遺跡群」と呼称する。同時期に展開した上総国分寺跡や尼寺跡は、調査区から小支谷を挟んで南に1.2kmほど離れている。

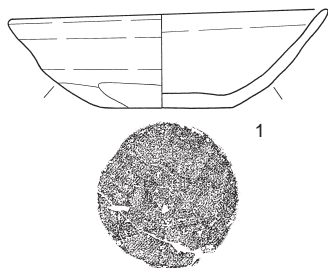
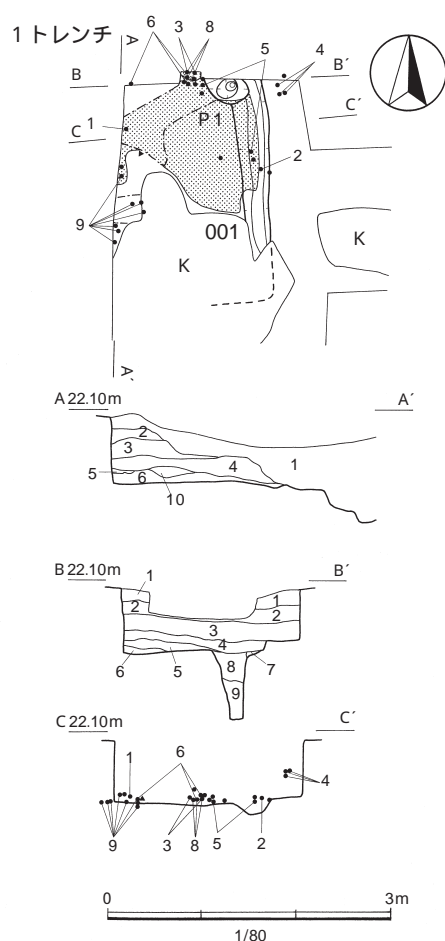
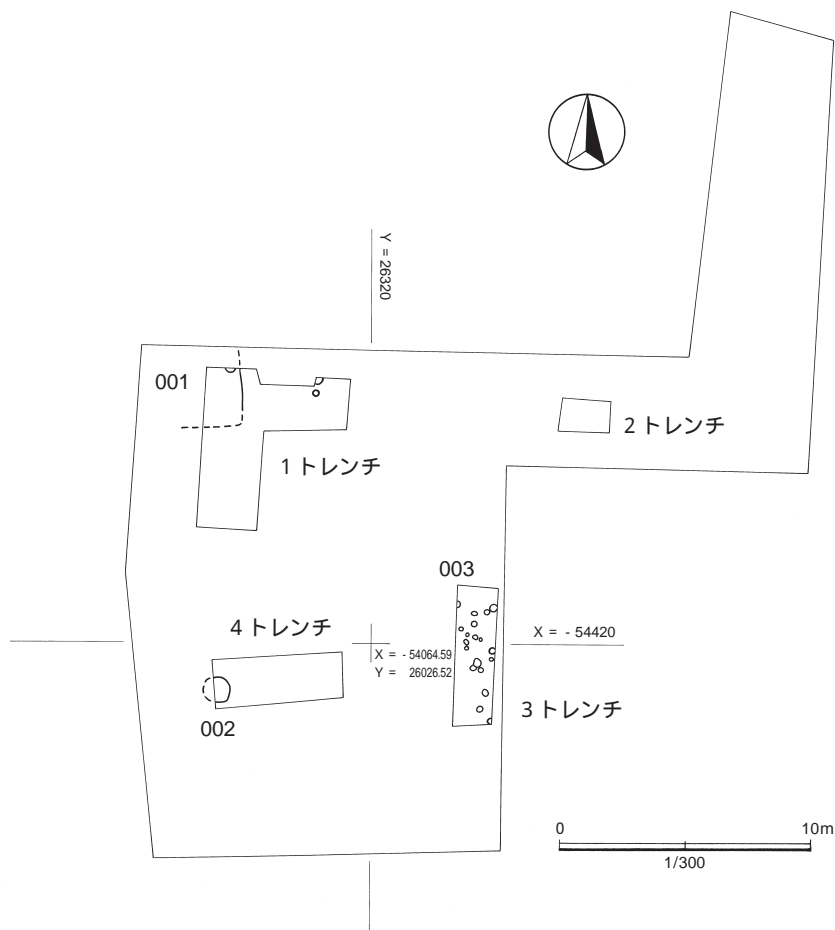
郡本遺跡群は、上総国府推定地を想定した学術調査が過去に7回実施されている（うち1回は地中レーダー探査）ほか、個人住宅の建築や建替えなどに先立ち、小規模な調査が断続的に行われている。その結果、弥生時代後期から平安時代にわたる遺構が検出されており、国府推定地のみならず、郡本の地名や地割り、八幡神社に残る大型建物の礎石とみられる石などから、市原郡衛推定地とも考えられている。それを決定的に裏付ける遺構や遺物ははまだ検出されていないが、掘立柱建物や大規模な溝跡、緑釉陶器や特殊な墨書土器などは、通常の集落遺跡のみでは考えられないことを物語ってきた。

国府推定地確認調査では、主に郡本交差点の北東エリアの字古甲地域を中心に実施しており、名称も「古甲遺跡〇次」とした。一方、民間開発などの緊急調査には「郡本遺跡群第〇次」の呼称が使用されたため、双方入り乱れた状況となり今に至っている。

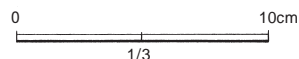
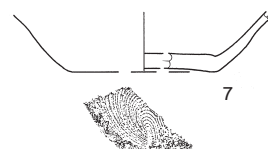
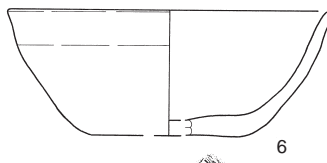
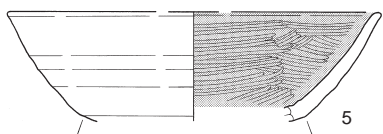
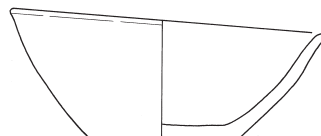
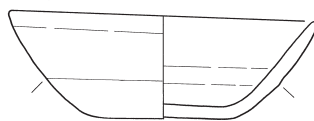
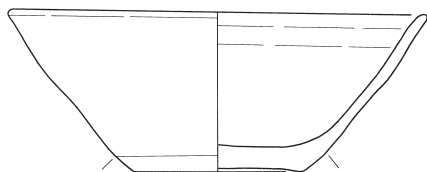
調査区は、郡本遺跡群のなかでは中央部の西端にあり、著名な弥生時代の人面土器が採集された三嶋台地区の南東200mほどに位置する。調査区の標高は22.1m前後である。南東近接地では、平成9年度の市内遺跡発掘調査事業(郡本3次)において確認・本調査を実施しており、古墳時代中期の竪穴建物跡1軒、平安時代8世紀末の竪穴建物跡1軒の他、東西に走る小規模な溝跡2条を検出している。



郡本遺跡群 (第8次)



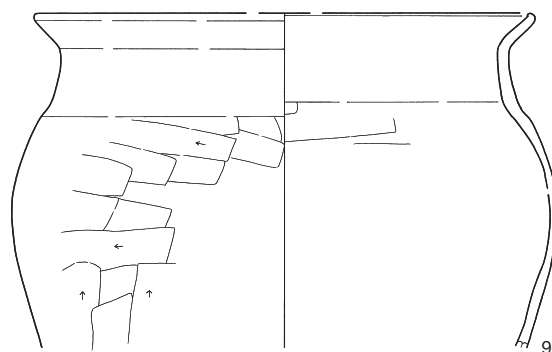
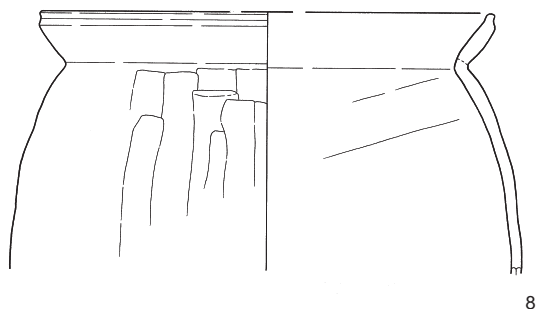
- 1 現表土
- 2 灰褐色 褐色土少量 サラサラしている
- 3 黒褐色-暗褐色 ローム粒 (1 ~ 2 mm) 少量だが均等
- 4 黒褐色-黒色 ローム粒 (1 ~ 5 mm) 少量だが均等
- 5 黒褐色-暗褐色 ローム粒 (2 ~ 4 mm) 少量 焼土粒 (1 ~ 4 mm) 少量だが均等 粘土粒 (3 ~ 5 mm) 少量
- 6 黒褐色-黒色 ローム粒 (1 ~ 3 mm) 微量 粘土粒 (1 ~ 3 mm) 微量
- 7 黒褐色 ロームブロック (5 ~ 10mm) 少量だが均等
- 8 黒褐色-褐色 ロームブロック (3 ~ 10mm) 少量 焼土粒 (5 ~ 10mm) 少量 炭化物粒 (5 mm) 微量
- 9 黒色 ロームブロック (5 mm) 少量 炭化物粒 (5 mm) 微量
- 10 黒褐色-暗褐色 粘土粒 (1 ~ 5 mm) 均等 しまり弱い



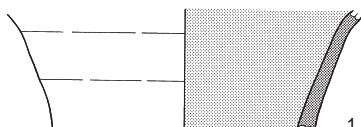
第3図 郡本遺跡群 (第8次) 全体図、1トレンチ実測図・出土遺物

郡本遺跡群（第8次）

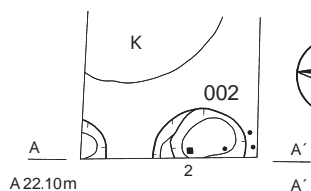
1 トレンチ出土遺物



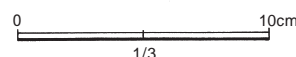
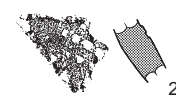
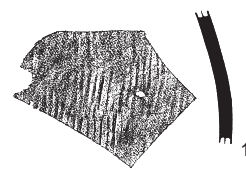
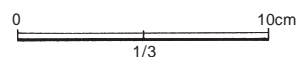
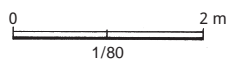
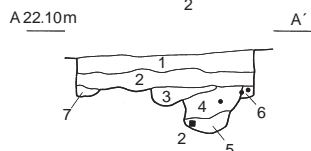
3 トレンチ出土遺物



4 トレンチ



- | | |
|-----------|---|
| 1 現表土 | |
| 2 灰褐色・褐色 | ロームブロック (5 ~ 20mm) 均等
攪はんされているように見える |
| 3 暗褐色・褐色 | ロームブロック (5 ~ 10mm) 微量 炭化物粒 (5 mm) 微量 |
| 4 暗褐色～灰褐色 | ロームブロック (5 ~ 10mm) 少量 炭化物粒 (5 mm) 微量 |
| 5 黒色～黒褐色 | ローム粒 (1 ~ 5 mm) 少量 |
| 6 黒褐色～褐色 | ロームブロック (5 ~ 10mm) 少量 しまり弱い |
| 7 黒褐色 | ローム粒 (5 ~ 10mm) 均等 しまり弱い |



第4図 1・3トレンチ出土遺物、4トレンチ実測図・出土遺物

調査概要 調査は個人住宅の建設に先立ち実施された。調査区全体に近現代の攪乱が多くみられたが、1トレンチで平安時代の竪穴建物跡1軒、3トレンチで時期不明のピット群、4トレンチで中世の土坑1基を検出した。トレンチ名は調査時のとおりであり、遺構番号は整理作業において変更した。

遺構と遺物 1トレンチ001竪穴建物跡はその南半を攪乱されており、東側壁が1.7mほど残存するのみである。その壁沿いに幅22.0～37.0cm・深さ6.1～10.0cmの壁周溝を検出した。床面は部分的に硬化しており、床面標高は21.30m前後であった。硬化面以外の部分にも多量の白色粘土が散っていた。カマドの構築土とみられるが、カマド本体の位置は特定できないため、竪穴の主軸方向は不明である。東壁に付くように検出したピットP1は、深さ76.4cmを測り、底面に柱アタリが観察された。P1の西側には焼土とともに遺物が集中する地点があり、トレンチの一部を拡張して確認した。

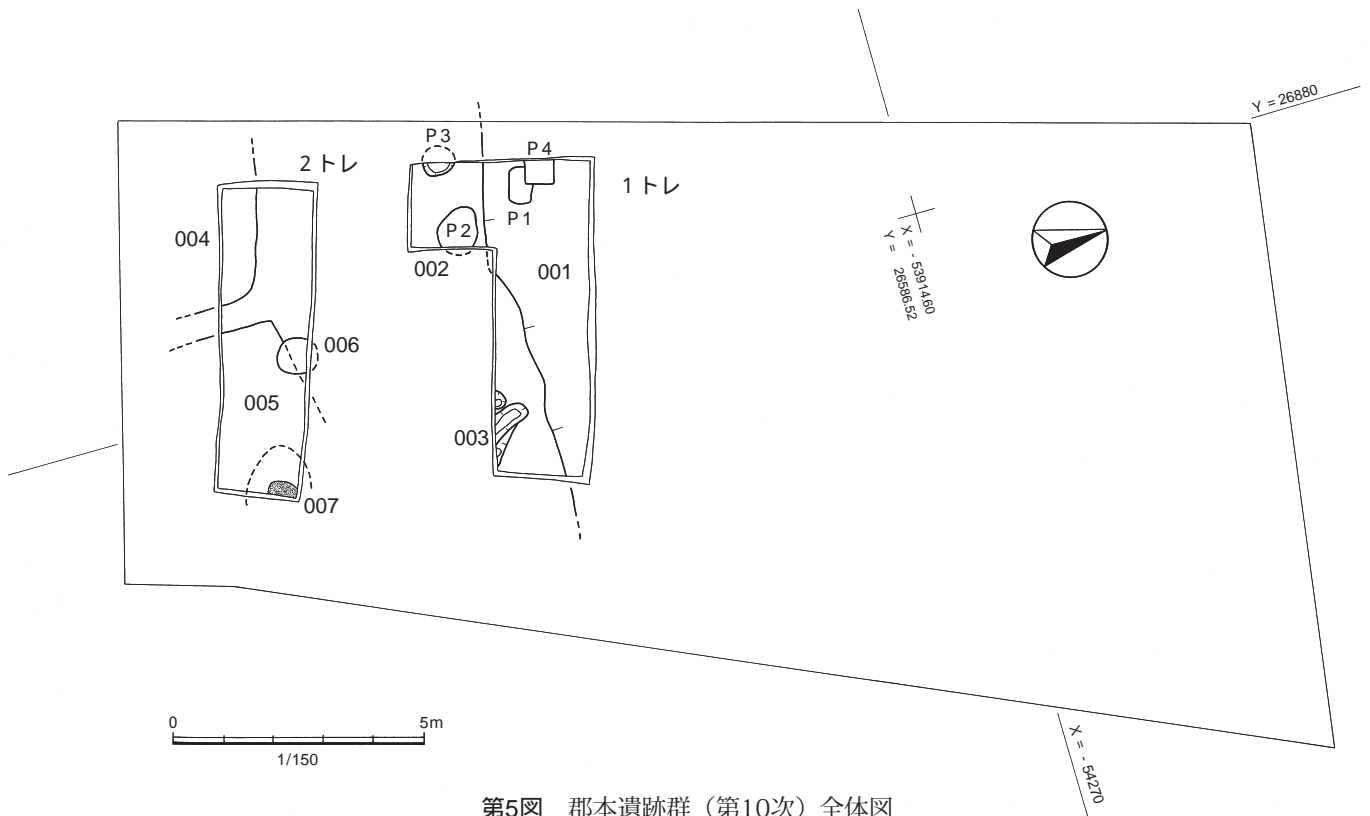
出土遺物は、第3図1が底部手持ちヘラ削りの坏、2～4が底部回転ヘラ削りの坏、5は内面黒色処理、6・7は底部回転糸切り後無調整の坏などがあげられ、総じて底径が小型化する時期の所産であろう。2は壁周溝上に伏せて置かれており（図版1）、4以外は001床面付近からの出土である。

2トレンチは攪乱が激しく遺構はみられなかった。3トレンチはピット群が検出されたが、時期は不明である。第4図1の灰釉陶器の瓶類頸部片が出土している。4トレンチでは土坑を検出した。最大径100cm、深さ50cmを測る。覆土下層から常滑焼の甕小片（第4図2）が出土しており、中世の土坑とみられる。

3 郡本遺跡群（第10次）（遺構：図版1・2／出土遺物：図版6・7）

遺跡の位置と周辺の調査状況 市原台地の国府推定地を南北に縦貫する国道297号線と東西に走る県道五井・本納線が交差する郡本交差点の北東エリアにあり、国府推定地確認調査を断続的に実施した地域である（第2図参照）。東側隣接地は平成8年度に字「古光」にあたる地域として、確認調査（第5次C地点）を行っており、弥生時代後期の竪穴建物跡1軒のみを確認した。付近は遺構密度が低く、奈良・平安時代の遺構が確認されなかったことは、この地域においてなんらかの意味ある事象と考えられた。一方、西北西70mの畑では、平成4年度の高甲第2次調査（以下「高甲2次」と記す）において、地割に沿う大規模な溝跡を検出している。溝跡の主軸方位はN-69°-Wで、最大検出長27.0m、最大幅8.2m、遺構確認面からの深さは1.4mほどの規模である。土層断面から数度の掘り直しが観察され、出土遺物には布目瓦片が多くみられ、灰釉陶器や緑釉陶器などの小片も含まれていた。この規模の溝によって区画される施設の存在などが想定されるが、その性格は判然としない。さらに、この溝の南東側推定延伸方向50～80m先の畑（今回調査区北側隣接地を含む）において、平成5年度に地中レーダー探査を実施したところ、同様の溝跡を捕捉することはできなかった。

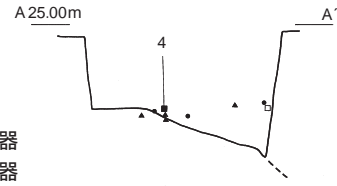
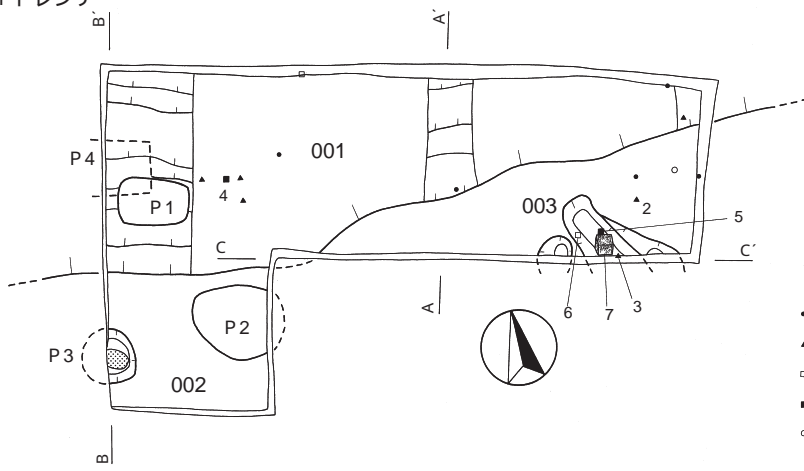
調査概要 調査は建売住宅建設に先立ち実施された。本事業では27㎡の確認調査のみを扱うが、保護層の確保が困難な浄化槽設置部分（7㎡）については、同時に市単独費用で本調査を実施した。確認トレンチは母屋基礎部分を除ける形で設定したため、庭部分に偏った配置となった。1トレンチでは、高甲2次の溝跡との関連性を想起させる溝跡1条（001）と中世の掘立柱建物跡とみられるピット4基（002P1～P4）、五輪塔の地輪が出土した土坑1基（003）を確認した。2トレンチでは、弥生時代後期の竪穴建物跡1軒（005）、中世の貝層を伴う土坑1基（007）のほか、中近世の所産と推定される土坑（004）などを確認した。



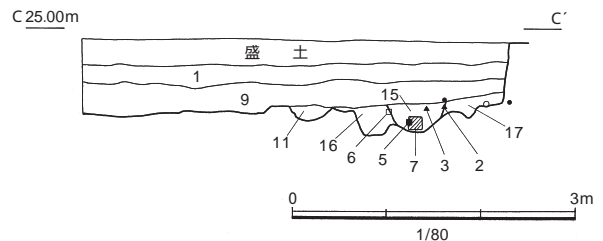
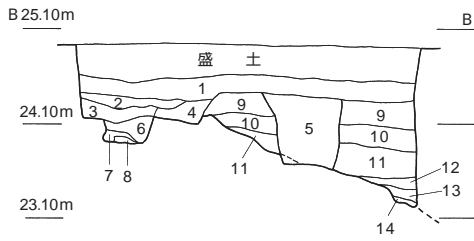
第5図 郡本遺跡群（第10次）全体図

郡本遺跡群 (第10次)

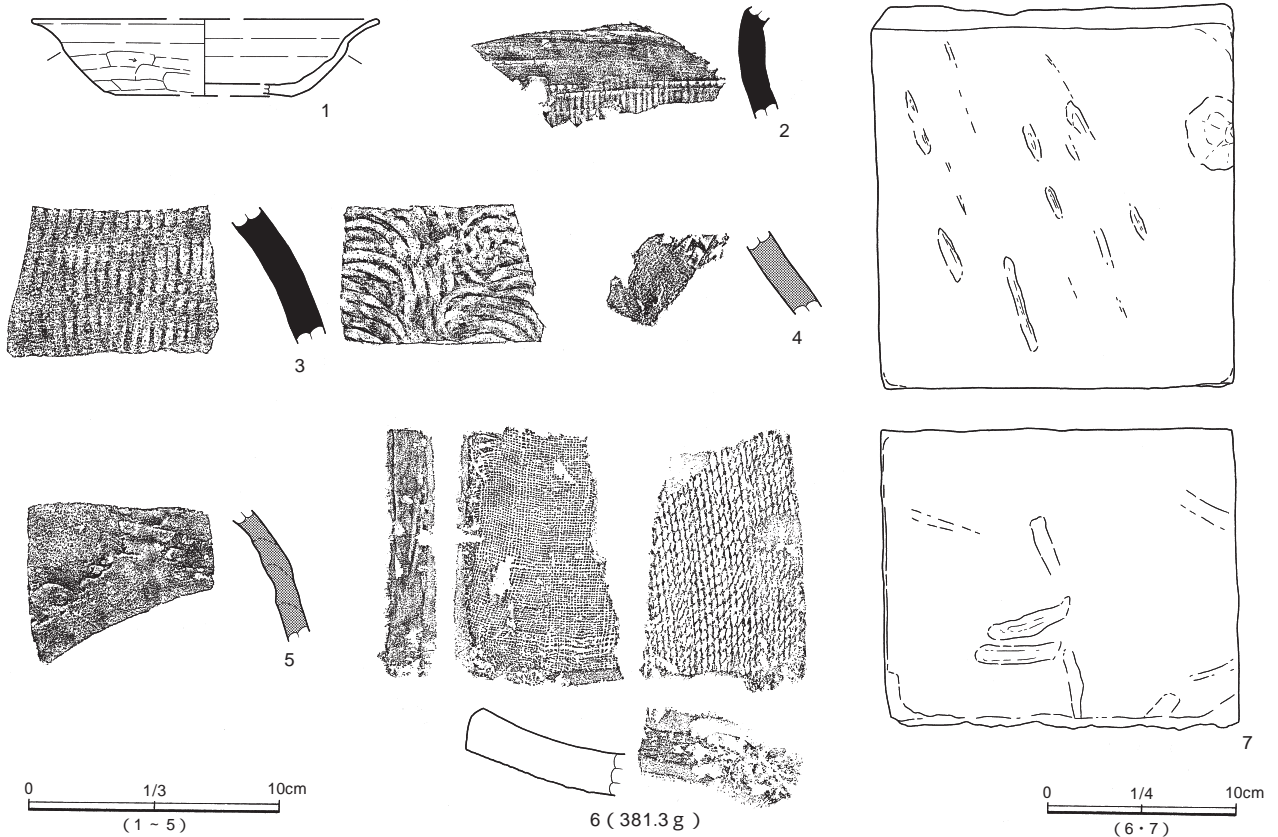
1 トレンチ



- 土師器
- ▲ 須恵器
- 瓦
- 中世陶器
- その他

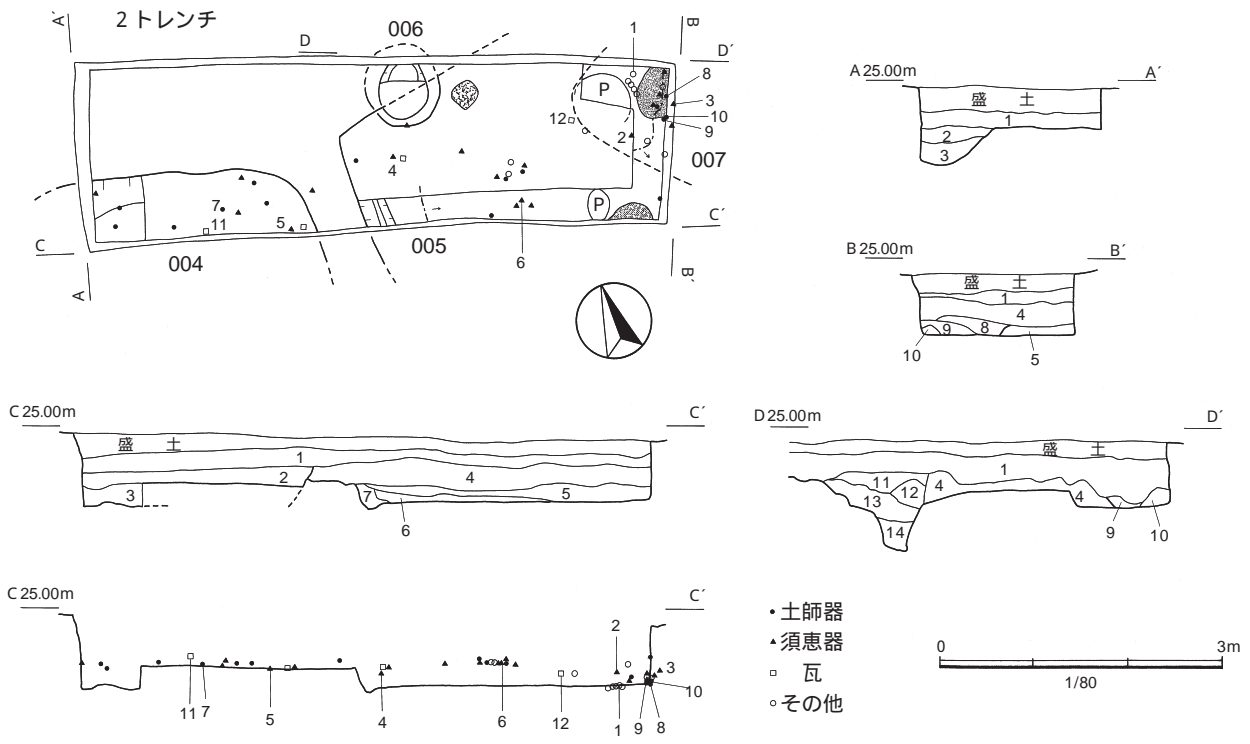


- | | |
|---|---|
| <p>1 暗褐色 橙色粒 (~ 5mm)・炭化物粒 (~ 3mm) 多い ローム粒 (~ 8mm) まばら
しまり強い 耕作の影響あり</p> <p>2 暗褐色 1層より暗 ローム粒 1層より多い</p> <p>3 褐色 ロームブロック (~ 10mm)・白色粘土粒 (~ 3mm) まばら</p> <p>4 暗褐色 ソフトローム混ざる 2層~4層は1層形成時 (=近世~近代) の掘り込みか</p> <p>5 暗褐色 ロームブロック (~ 50mm) 多い 002P4 覆土</p> <p>6 暗褐色 白色粘土粒 (~ 10mm) 多い 002P3 覆土</p> <p>7 暗褐色 6層 + 白色粘土粒・白色粘土ブロック</p> <p>8 白色粘土ブロック</p> <p>9 暗褐色 1層より明色 ローム粒・橙色粒・炭化物粒など1層よりやや混ざり少ない
中世~近世に形成か</p> | <p>10 暗褐色 9層より明色 ローム粒 (~ 3mm) まばら</p> <p>11 褐色 ローム粒~ブロック (~ 15mm) 多い 001 溝跡覆土で特徴的な層</p> <p>12 褐色 11層に類似 11層より混ざり少ない</p> <p>13 褐色 11層に類似 ソフトロームが多いためやや明色</p> <p>14 暗褐色 ローム粒などの混ざりがほとんどない 粘性あり</p> <p>15 暗褐色 ローム粒 (~ 8mm) まばら 003 土坑覆土</p> <p>16 暗褐色 11層に類似 ロームブロック (~ 10mm) 多量
001 溝跡覆土とともに平安~中世に形成された凹み</p> <p>17 暗褐色 16層に近いが明色 16層よりソフトローム多いが混ざり少ない
11・16層とともに溝が埋まる段階で形成</p> |
|---|---|

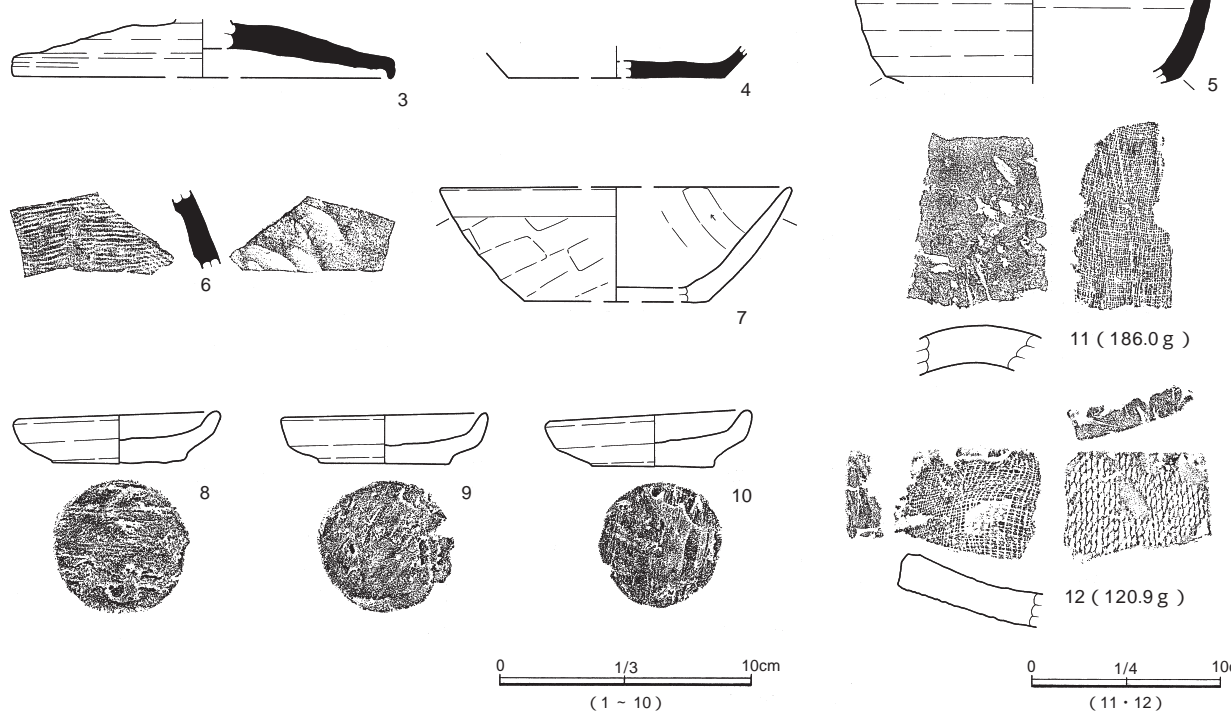


第6図 1トレンチ実測図・出土遺物

郡本遺跡群 (第10次)



- 1 暗褐色 橙・ローム・炭などまざり多い 盛土造成の圧力でしまり強い 耕作土
- 2 暗褐色～灰褐色 ローム粒(～8mm)多い 004 土坑覆土上層 4層形成後に掘り込む
- 3 暗褐色 ロームブロック・ソフトローム多く混ざり合う 004 土坑覆土下層
- 4 暗褐色 ローム粒(～4mm)まばら 土器細片多い 一部 005 竪穴床面まで到達
- 5 暗褐色 4層より暗色 ローム粒(～4mm)・ロームブロック(～20mm)数点入る 炭化物粒(5mm)まばら 005 竪穴覆土
- 6 暗褐色 5層+炭化物多い 005 覆土
- 7 暗褐色 ソフトローム混ざる 005 壁周溝部覆土
- 8 黒褐色 灰褐色土粒(～5mm)少量 根多く含む 007 土坑覆土
- 9 黒褐色 8層に類似 8層よりやや明色 二枚貝を主体とした貝層含む
- 10 貝層 二枚貝主体 炭化物混ざる
- 11 褐色 ローム粒(～8mm)多い 耕作の影響有り
- 12 褐色 ロームブロック(～50mm) 006 覆土
- 13 褐色 ロームブロック(～80mm)多量 006 覆土
- 14 明褐色 ロームブロック(～50mm)多量 006 覆土下層



第7図 2トレンチ実測図・出土遺物

郡本遺跡群（第10・11次）

遺構と遺物 1トレンチ001溝跡は、確認面での最大検出長6.44m・最大幅2.12m・深さ0.96mを測り、方向はN-88°-Wで、ほぼ東西方向に確認された。ただ、溝状遺構の南端の掘り込み部分を確認したにすぎず、溝の最深部分もさらに北となる可能性が高い。掘り込みの傾斜は22°であり、古甲2次検出の溝跡の南側傾斜は31°であることを考えるとやや緩やかである。出土遺物は、確認面付近では中世陶器も含まれるが、サブトレンチで掘り下げた溝の覆土中からは、平安時代の遺物のみがみられた。また、この溝の覆土を002掘立柱建物跡のP1とP4が掘り込んでいる。P4はP1の覆土を切る形で掘られていた。P1の覆土より常滑焼の甕破片が出土しているため、中世の所産と思われるが、柱の並びや組合せは判別できず、各穴には柱痕や柱アタリもみられなかった。P2及びP3の確認面とP3の底面付近では白色粘土粒が多くみられ、覆土も類似するため、同時期のピットと思われる。2トレンチ006も同系のピットの可能性がある。各ピットの底面標高は、P1：23.46m・P2：23.59m・P3：23.84m・P4：23.67m・006：23.74mである。003土坑は、長軸0.78m・短軸0.40m・深さ24.7cmを測り、五輪塔の地輪とともに平瓦と常滑焼の甕片（第6図5～7）が出土した。

2トレンチ005竪穴は、サブトレンチ調査により、壁周溝と硬化面を検出した。硬化面に貼り付く状態で弥生時代後期の甕形土器（第7図1）が出土したため、その時期の竪穴と考えられる。しかし遺構確認面付近での出土遺物は、大半が奈良・平安時代の遺物であり、第7図2～4はやや古い様相がみられた。トレンチ北東角に貝層が検出され、カワラケ3枚（第7図8～10、うち9と10は重ねて伏せられていた）が共伴したため、中世の土坑内貝層とみられる（007土坑）。貝層の規模は長軸最大55cm、厚さは20cmほどであるが、貝の密度は低く、混貝土層の様相を呈していた。トレンチ内の貝層をサンプルとして採取し分析した。貝層は水洗後重量で1,640g。混土率は79%、貝殻破砕率は69%と遺存状態はあまりよくない。貝類の総数は74点、このうちハマグリが42点（56%）、アサリが23点（31%）と二枚貝が主体を占め、ほかにイボキサゴ・ウミニナ・マガキ・オキシジミ・シオフキがみられる。貝類以外では、獣骨・魚骨がわずかにみられたが、小破片のため種同定には至らなかった。ほかに、炭化物が比較的多くみられ、わずかに炭化米も検出された。

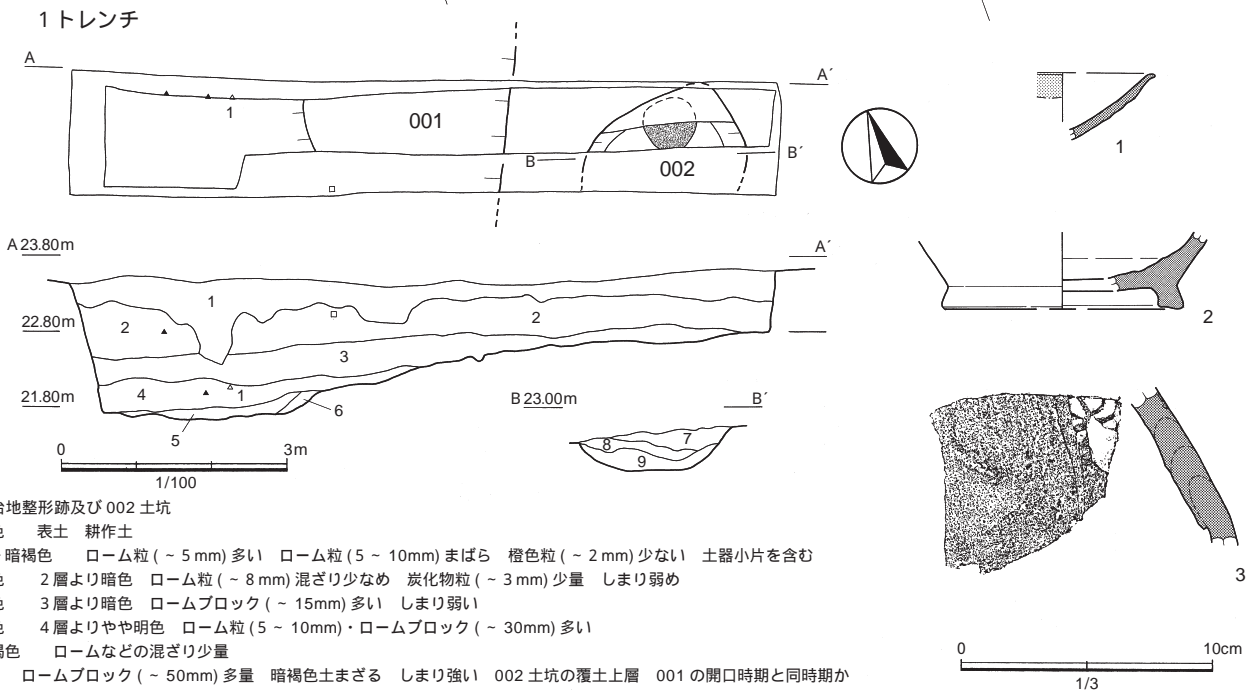
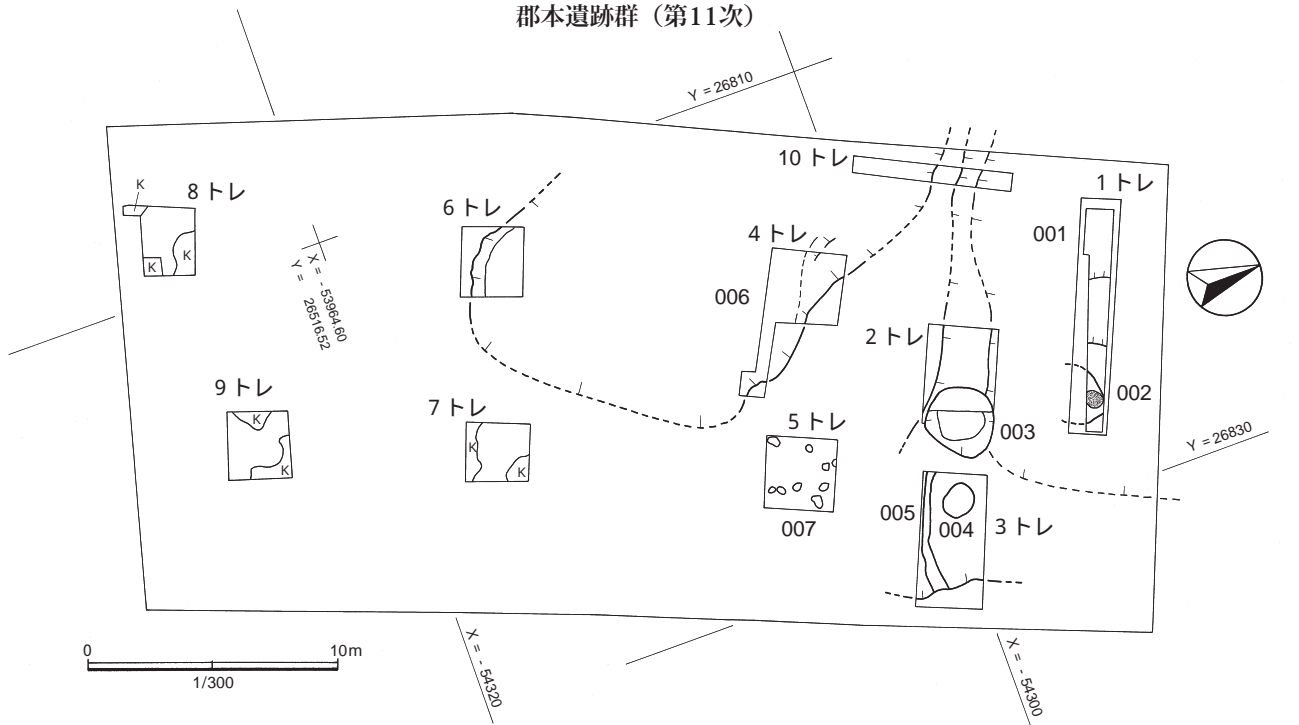
004土坑も主に奈良・平安時代の遺物がみられ、第7図5の須恵器坏は永田・不入窯産とみられる。耕作土直下の層より掘り込んでいることから、中近世の所産であろうと推定される。他に両トレンチ合わせて鉄滓が8点456.1g、2トレンチから羽口小片2点が出土している。

4 郡本遺跡群（第11次）（遺構：図版2・3／出土遺物：図版6・8）

遺跡の位置 10次調査区より南西に50mほどの位置（第2図参照）にあり、南北方向に長い短冊形の地割である。その地割の方向が、古甲2次調査で検出した大規模な溝跡に対して、南南西方向に折れてほぼ直角をなすことから、関連する溝跡や南から続く古代官道ルートが存在も予想されていた。また近年では、調査区から南西に60mほどの国道297号線沿いにおいて、財団法人千葉県文化財センターが平成13年度に調査を行っており、8世紀の竪穴建物跡や土坑を検出している。

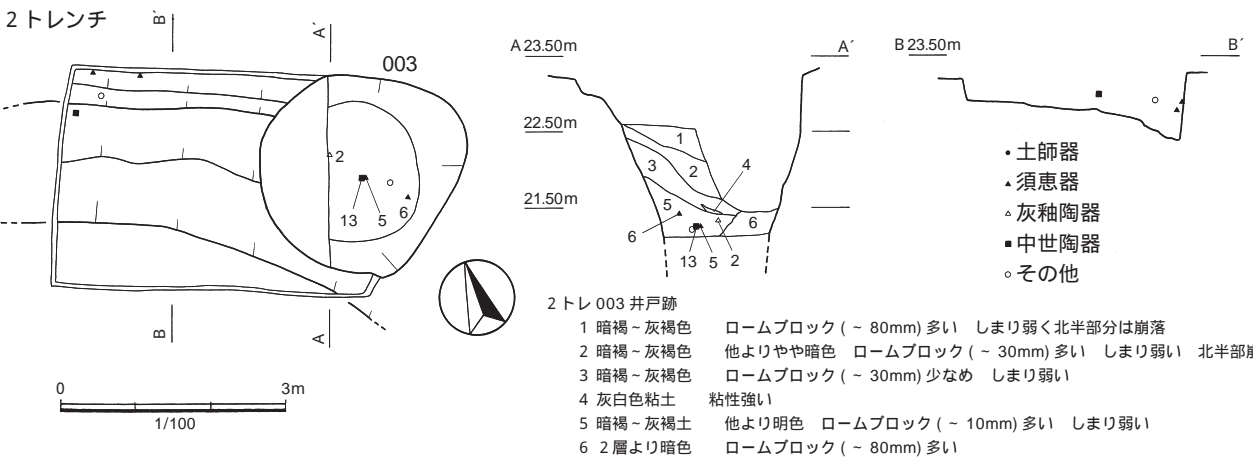
調査概要 現状は畑であり、現地表の標高は北端付近で23.6m前後、南端付近で23.0m前後であり、南に向かって緩やかに傾斜している。集合住宅建設に先立ち確認調査を実施した結果、中世の台地整形跡2箇所・井戸跡1基・貝層を含む土坑1基・小規模な溝跡1条、奈良・平安時代の土坑1基を確認

郡本遺跡群 (第11次)



1トレ 001 台地整形跡及び002 土坑

- 1 暗褐色 表土 耕作土
- 2 褐色~暗褐色 ローム粒 (~ 5mm) 多い ローム粒 (5 ~ 10mm) まばら 橙色粒 (~ 2mm) 少ない 土器小片を含む
- 3 暗褐色 2層より暗色 ローム粒 (~ 8mm) 混ざり少なめ 炭化物粒 (~ 3mm) 少量 しまり弱め
- 4 暗褐色 3層より暗色 ロームブロック (~ 15mm) 多い しまり弱い
- 5 暗褐色 4層よりやや明色 ローム粒 (5 ~ 10mm)・ロームブロック (~ 30mm) 多い
- 6 暗灰褐色 ロームなどの混ざり少量
- 7 褐色 ロームブロック (~ 50mm) 多量 暗褐色土まざる しまり強い 002 土坑の覆土上層 001 の開口時期と同時期か
- 8 暗灰褐色 イボキサゴ主体貝層 ロームブロック (~ 20mm) 少量 しまり弱い
- 9 褐色~灰褐色 7層に類似するがやや暗色 ロームブロック多量+暗褐色土 しまり強い 002 土坑覆土下層



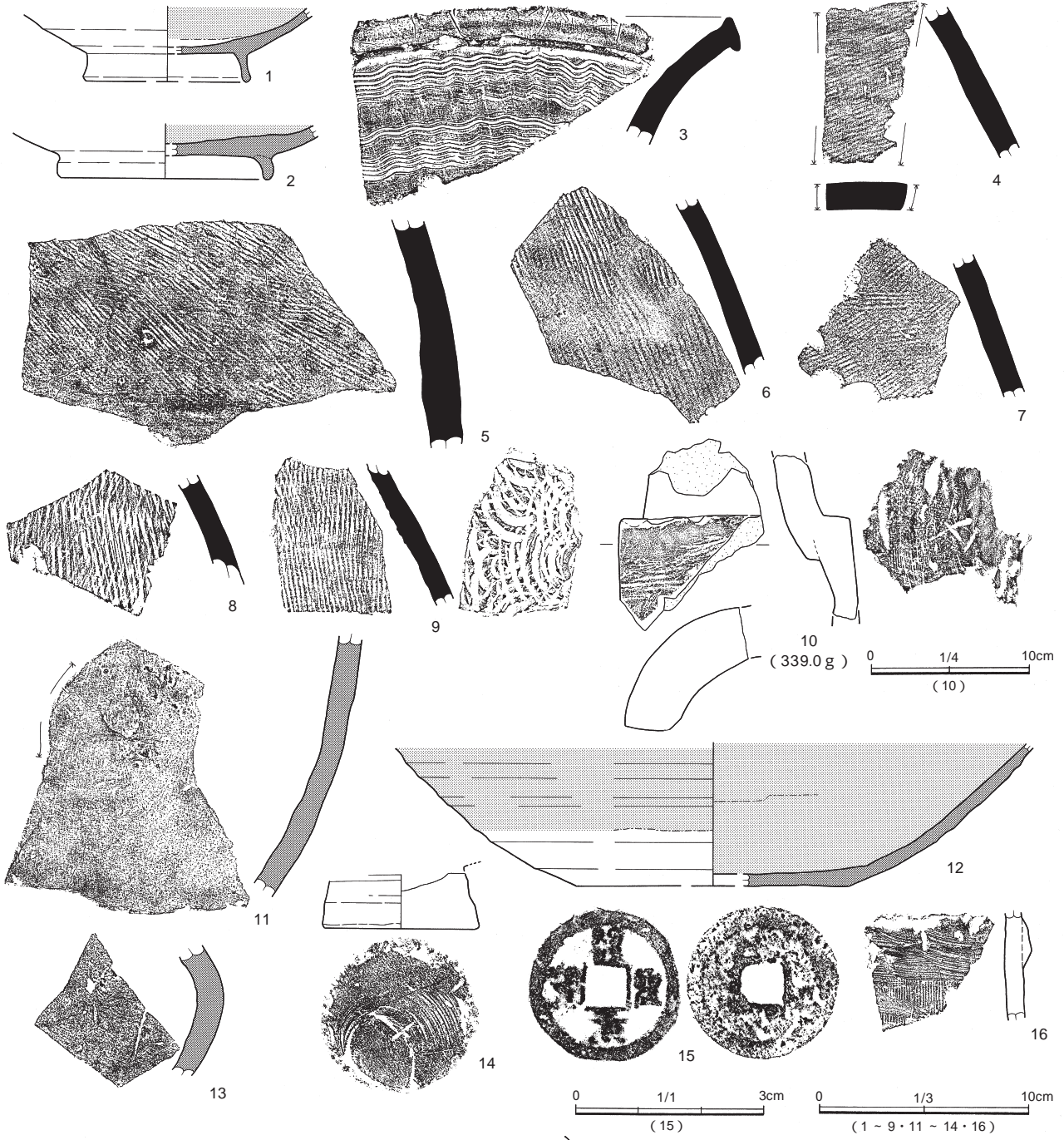
2トレ 003 井戸跡

- 1 暗褐~灰褐色 ロームブロック (~ 80mm) 多い しまり弱く北半分は崩落
- 2 暗褐~灰褐色 他よりやや暗色 ロームブロック (~ 30mm) 多い しまり弱い 北半分崩落
- 3 暗褐~灰褐色 ロームブロック (~ 30mm) 少なめ しまり弱い
- 4 灰白色粘土 粘性強い
- 5 暗褐~灰褐色 他より明色 ロームブロック (~ 10mm) 多い しまり弱い
- 6 2層より暗色 ロームブロック (~ 80mm) 多い

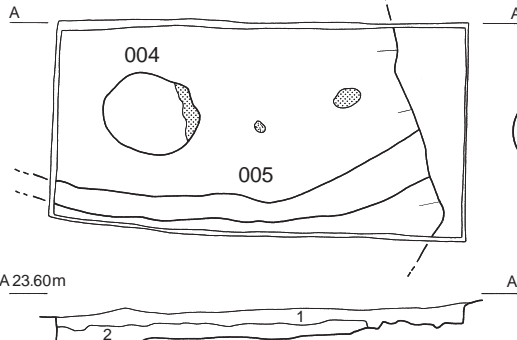
第8図 郡本遺跡群 (第11次) 全体図、1トレンチ実測図・出土遺物、2トレンチ実測図

郡本遺跡群 (第11次)

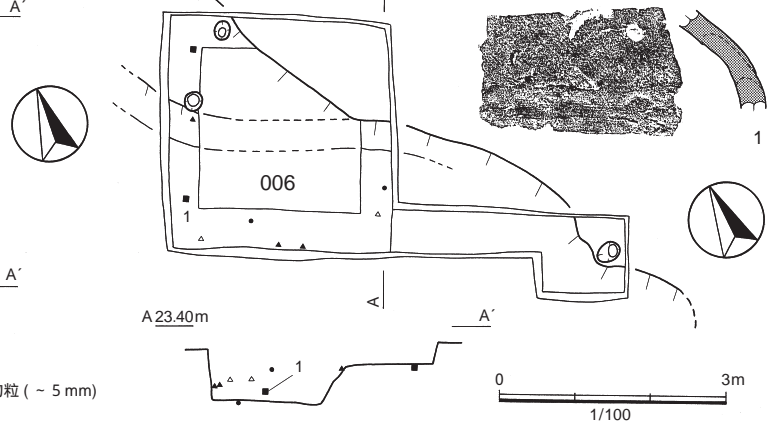
2 トレンチ出土遺物



3 トレンチ



4 トレンチ



- 1 暗褐色 表土 耕作土
- 2 暗褐色-灰褐色 ロームブロック (~ 20mm) 多量 炭化物粒 (~ 5mm) ・ 橙色粒 (~ 5mm) やや多い

第9図 2トレンチ出土遺物、3トレンチ実測図、4トレンチ実測図・出土遺物

郡本遺跡群（第11次）

した。結果として、当初想定された古甲2次調査の溝跡などに関連する遺構は確認されなかったが、このエリアではさほど注目されてこなかった中世における土地利用状況を確認した。

遺構と遺物 001跡は1トレンチでは西に向かって緩やかに落ち込む状況が確認され、2トレンチと10トレンチでは北に掘り込まれている状況からみて、溝跡とも土坑とも表現できない平面形状でもあり、これを台地整形跡とした。1トレンチ東端におけるローム確認面からトレンチ西端の最深部まで緩やかに傾斜し、比高差1.18mを測る。最深部のレベルは21.63mである。南側の2トレンチ内の傾斜は、トレンチ南端で23.0m前後、北端の落ちる部分で22.4mほどであり、比高差60cmとなる。一方、南西に位置する10トレンチ北端では、22.77mから北に21.45mまで急傾斜で掘り込まれ、深さ1.32mを測る。

これらのプランをつなぎ合わせると検出長軸10.1m・短軸6.4mの掘り込みとなり、推定のラインはさらに大きな平面形状となる。また、3トレンチでは東端の確認面レベル（ハードローム面）が23.2mで、西に向かって地山を20cmほど切り下げる段整形を施したとみられる。さらに広範囲に土が動かされている可能性が十分に考えられ、地山の整形と表現してもよい状況であろう。

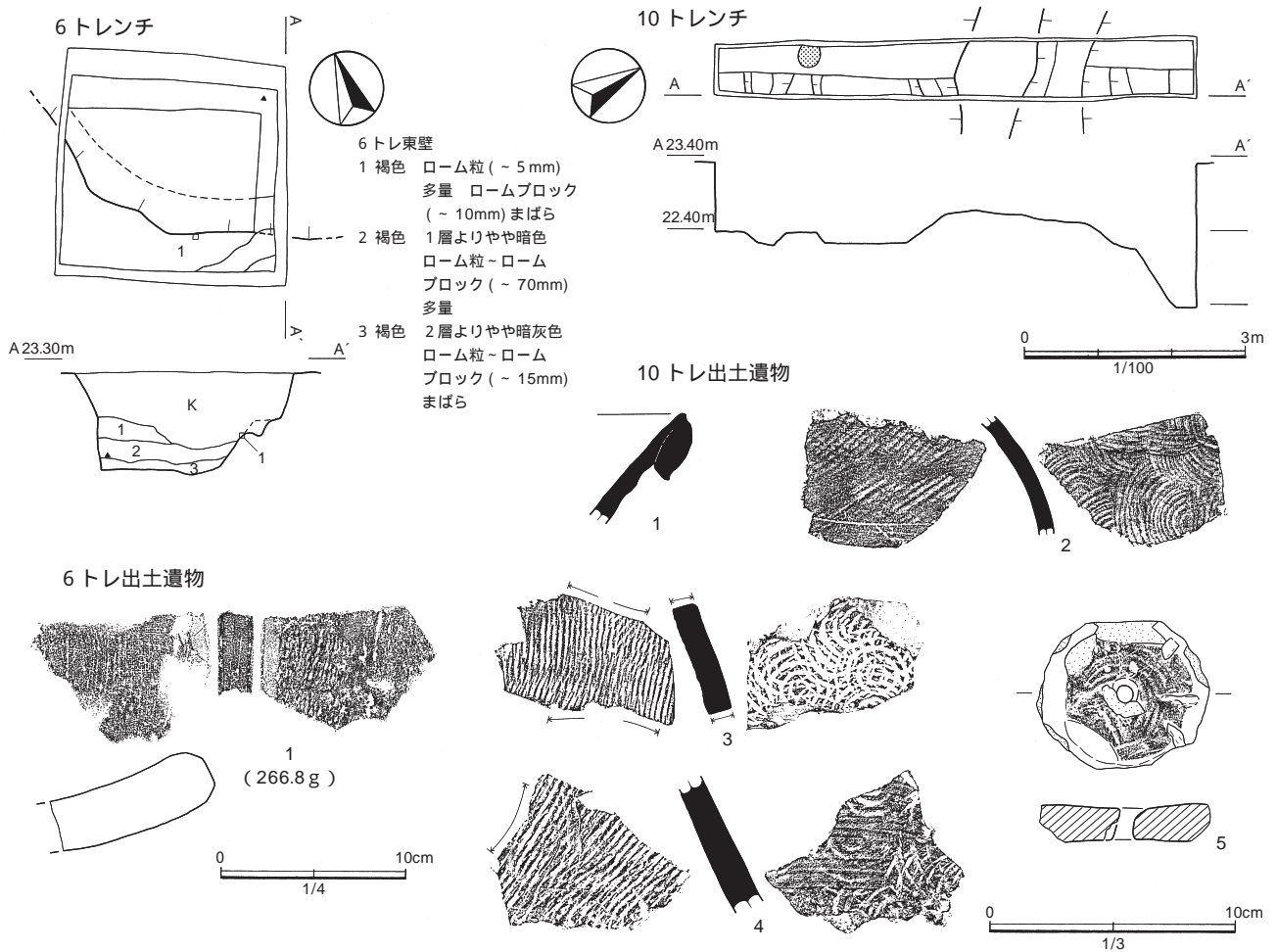
また、南側で検出された006跡も同様の土木工事が想定され、4トレンチで南西側に、6トレンチでは北側に掘り込む様子がみてとれ、001とともに一連の台地整形跡とみられる。確認された掘り込み底面レベルは、10トレンチ南半で22.15m、4トレンチで22.25m、6トレンチでは21.76mであった。確認面からの掘り込みの深さは4・10トレンチで60～70cm、6トレンチで76cmほどと、全体的に001より浅めだが、各トレンチの確認面において、すでにハードローム面まで削平されている状態（＝地山整形）であり、ソフトローム面は確認できなかった。これは5トレンチも同様であった。推定ラインも含めた平面プランは、南北18m・東西12mを測るものである。

これらの地山整形跡の覆土は、ロームブロックを多量に含む褐色土層が中心で、水平に近い均一的な堆積をなしており、平安時代と中世の遺物を包含している。覆土中の遺物量は、001・006ともに少なめで、小破片が目立った。第10図3・4の須恵器甕片のように、割れ口端部を砥石として使用したものとみられる破片が見受けられた。

1トレンチ東端において001台地整形と同時期とみられる土坑を確認し、覆土中に貝層が形成されていた。土坑の検出長軸は2.1mを測り、確認面からの深さは30cmであった。土坑中の貝層は、長軸最大150cm、厚さ15cmほどで、純貝～混土貝層の様相を呈する。貝層の上下をローム主体土で挟まれた状態であり、半分に断ち切りサンプルを採取した。その結果、混土率は49%、貝殻破碎率は22%と遺存状態は良好であった。貝の総数は11,915点、このうちイボキサゴが11,643点（97%）、ウミニナが115点（1%）、アラムシロが121点（1%）と巻貝が主体を占め、ほかにスガイ・ヘナタリ・サルボウガイ・マガキ・アサリ・シオフキがみられる。貝類以外では、カニ類の微細サイズの掌部破片が数点検出されたが、小破片のため種同定には至らなかった。ほかに、陸産微小貝類が総数243点と比較的多く検出された。主体は、オカチョウジガイとヒメベッコウマイマイであり、貝層形成当時の周辺環境が林縁地であったことが推定される。

2トレンチ003井戸跡は、長軸2.83m・短軸2.52mを測り、覆土は極めて短時間で埋められた状況が観察された。覆土に平安時代と中世の遺物を多く含んでおり、下層から常滑焼の甕片（第9図11）やウマの臼歯を検出した。図示した以外に緑釉陶器の小片なども含まれる。安全面を考慮し、地表下

郡本遺跡群 (第11次)



第10図 6・10トレンチ実測図及び出土遺物

2m付近で調査を断念した。3トレンチでは、上記の地山整形面に004土坑と005溝跡を確認した。004土坑は、覆土に白色粘土がみられ、掘立柱建物跡を想定し15cmほど掘り下げたが柱痕は確認されなかった。覆土の観察から、004は黒色系の覆土のため平安時代、005は001や003に類似する灰褐色系の覆土のため中世の所産と推定した。5トレンチでは時期不明のピット群 (007) を確認した。台地整形跡と003井戸跡などの遺構の配置に関連性があるのかどうか検討を要する。

調査区の南半には近年まで建造物があり、7トレンチ~9トレンチは攪乱を受けており、遺構は確認できなかった。

郡本遺跡群 (第10次) 中世遺物集計表 調査面積 26㎡ (確認調査)

種別	器種	分類	点数
常滑産陶器	甕	不明	1
渥美産陶器	甕	不明	1
瀬戸・美濃系陶器	緑釉小皿	後Ⅲ~Ⅳ	1
在地土器	R種カワラケ小皿	13C前~中	3

中世遺物 合計 6点
1㎡あたり 0.23点

郡本遺跡群 (第11次) 中世遺物集計表 調査面積 79㎡ (確認調査)

種別	器種	分類	点数
常滑産陶器		小計	19
	甕	5型式	1
	甕	不明	17
	片口鉢Ⅰ	不明	1
瀬戸・美濃系陶器		小計	6
	天目茶碗	後期	1
	播鉢	大窯Ⅰ	1
	深皿・盤類	後Ⅰ~Ⅲ	1
	緑釉小皿	後Ⅰ	1
	丸椀	大窯	1
	平碗	後Ⅱ	1
在地土器		小計	2
	柱状高台土器	12 C	1
	R種カワラケ小皿	中世前期	1
東海系土器	羽釜	15 Cか	1
貿易陶磁器	龍泉窯青磁碗	14 C	1
	白磁皿	Ⅷ類	1

中世遺物 合計 30点
1㎡あたり 0.38点

5 椎津向原遺跡 (遺構：図版3・4／出土遺物：図版6・9)

遺跡の位置 東京湾の海岸線を北西に望む、樹枝状で扇形に広がる台地上にある。調査区の南北及び西側から谷が入りこみ、北西に延びるその舌状台地の中央部分に位置する。調査区の標高は35m前後である。調査区北側の谷の対岸一帯は、戦国時代の椎津城跡として知られる。北北東440mに椎津城跡の主郭部があり、そこには墳丘長80m程の前方後円墳である外郭古墳がある。北東230mで五霊台遺跡が本調査され、円墳5基・古墳時代前期の竪穴建物跡30軒・後期の竪穴12軒のほか、椎津城関連とみられる溝跡などを検出している。さらに北東550mには椎津茶ノ木遺跡があり、古墳時代後期を中心とした縄文～平安時代までの竪穴建物跡193軒を本調査しており、遺構密度は極めて高い。茶ノ木遺跡の北側隣接地には石枕を出土したと伝えられる椎津稻荷山古墳がある。

調査概要 社宅跡地における宅地造成計画に先立ち、確認調査を実施した。社宅や寮などの取り壊しはなされず、既存建造物の間にトレンチを設定し調査を行った。その結果、古墳時代後期の竪穴建物跡20軒と平安時代の溝跡3条を確認した。竪穴建物跡はすべてにサブトレンチ調査をしたものではないため、その時期は前後するものがある可能性を否定できない。北側の谷に向かって緩やかに傾斜する地形のため、遺構確認面は北で深く南側では浅い傾向にあった。また、全体にかつての造成時の盛土が厚く堆積していたが、遺構の遺存状態は比較的良好な部分が多かった。

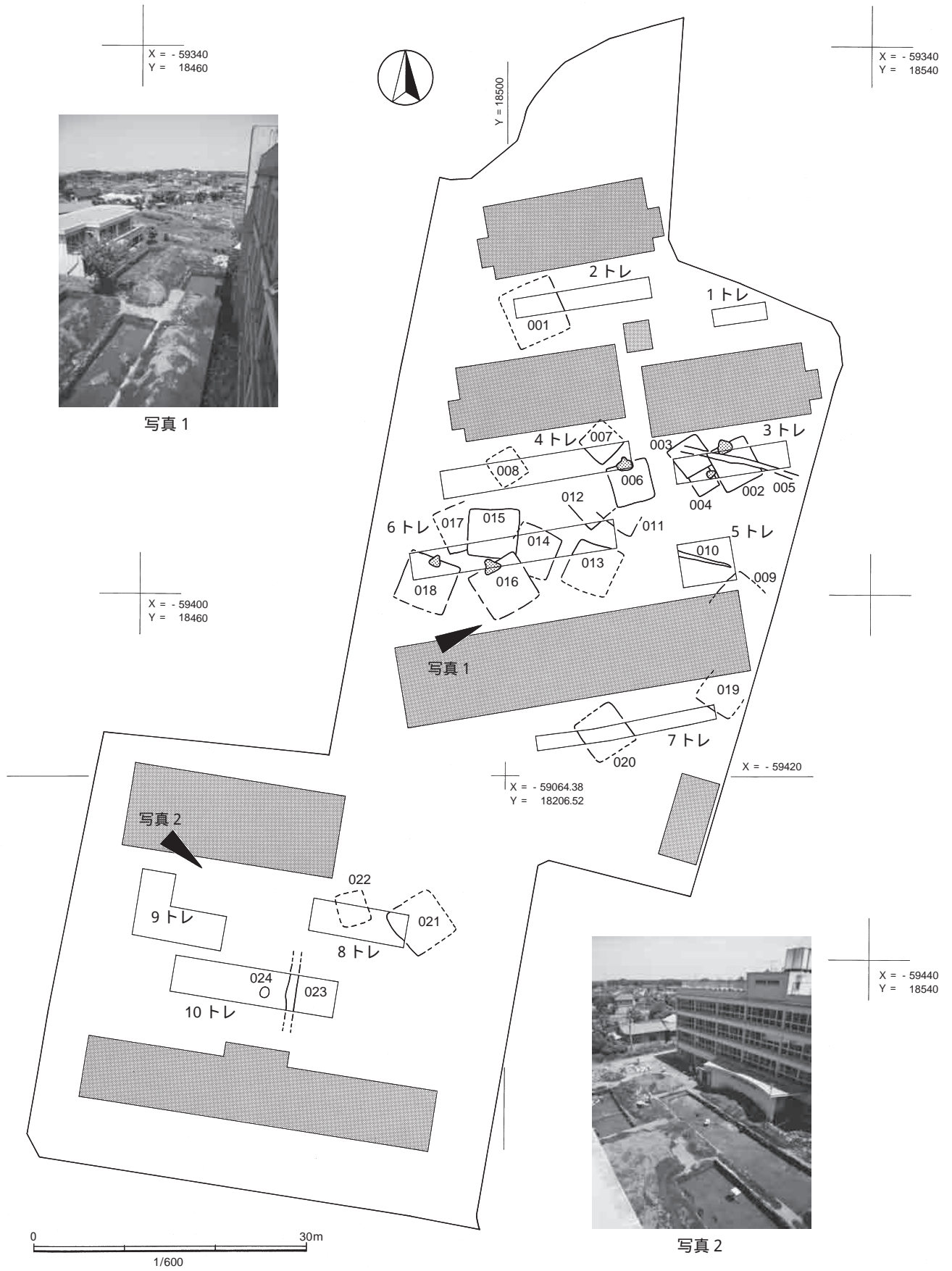


(市原市基本図1 / 2500, 昭和55年測図)

第11図 椎津向原遺跡周辺地形図

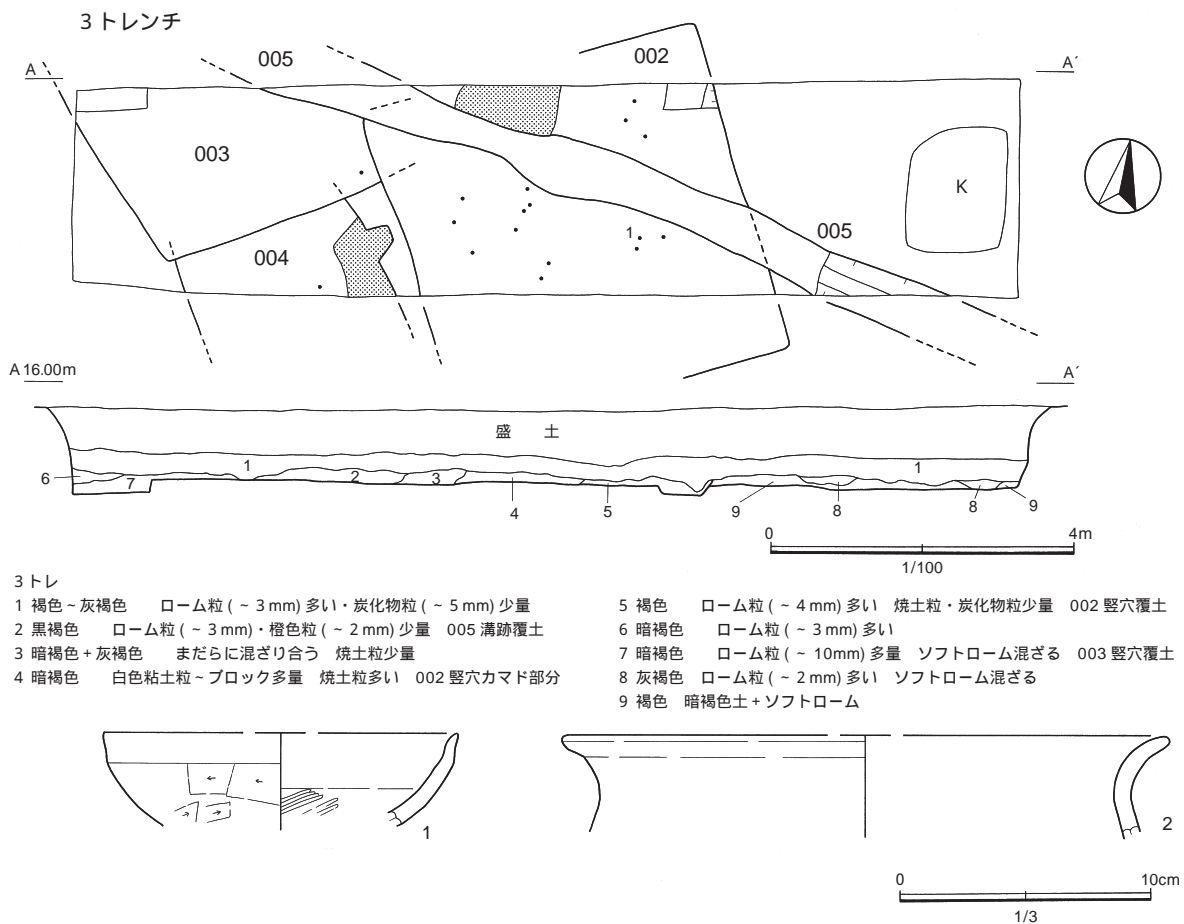
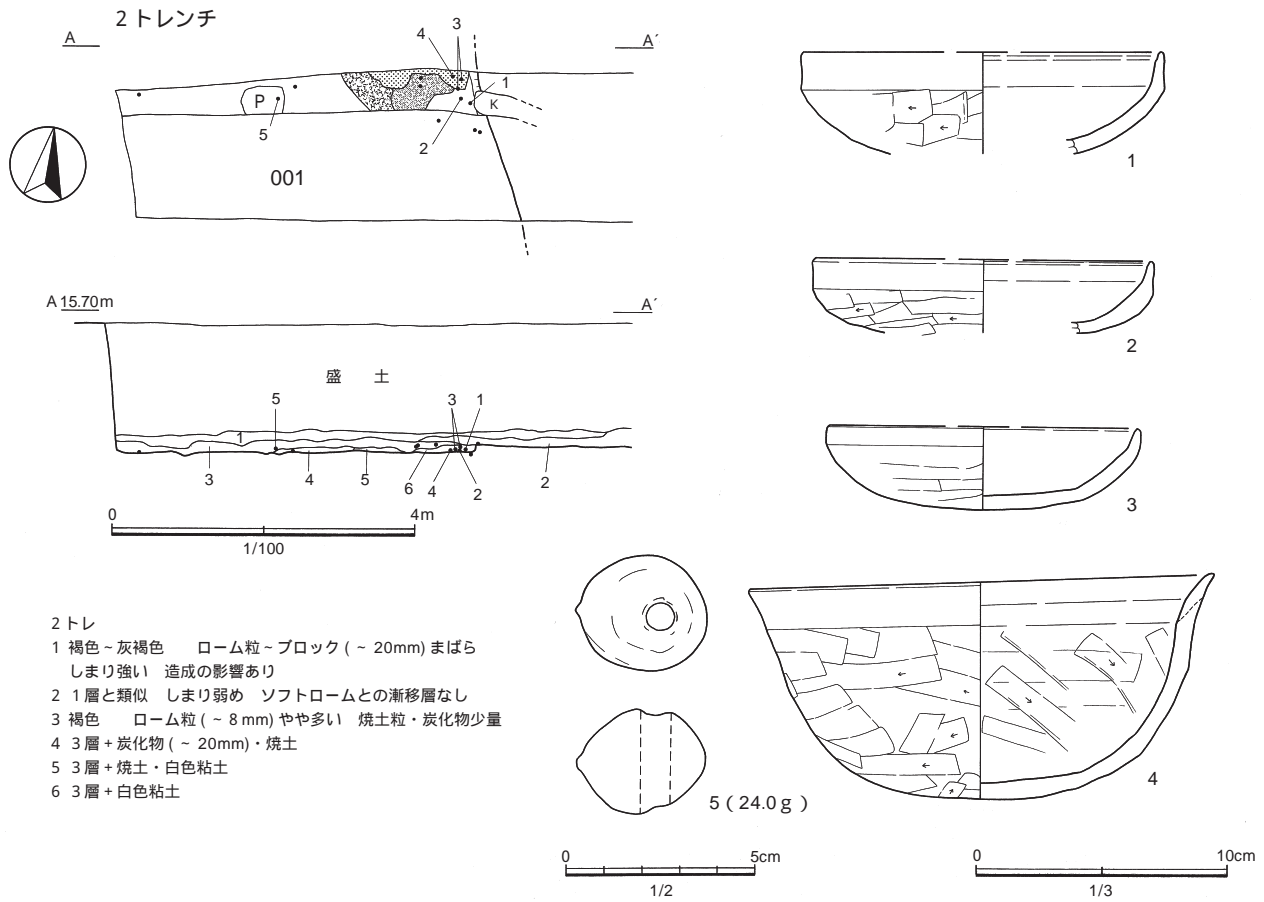
0 200 m
(1 / 5,000)

椎津向原遺跡



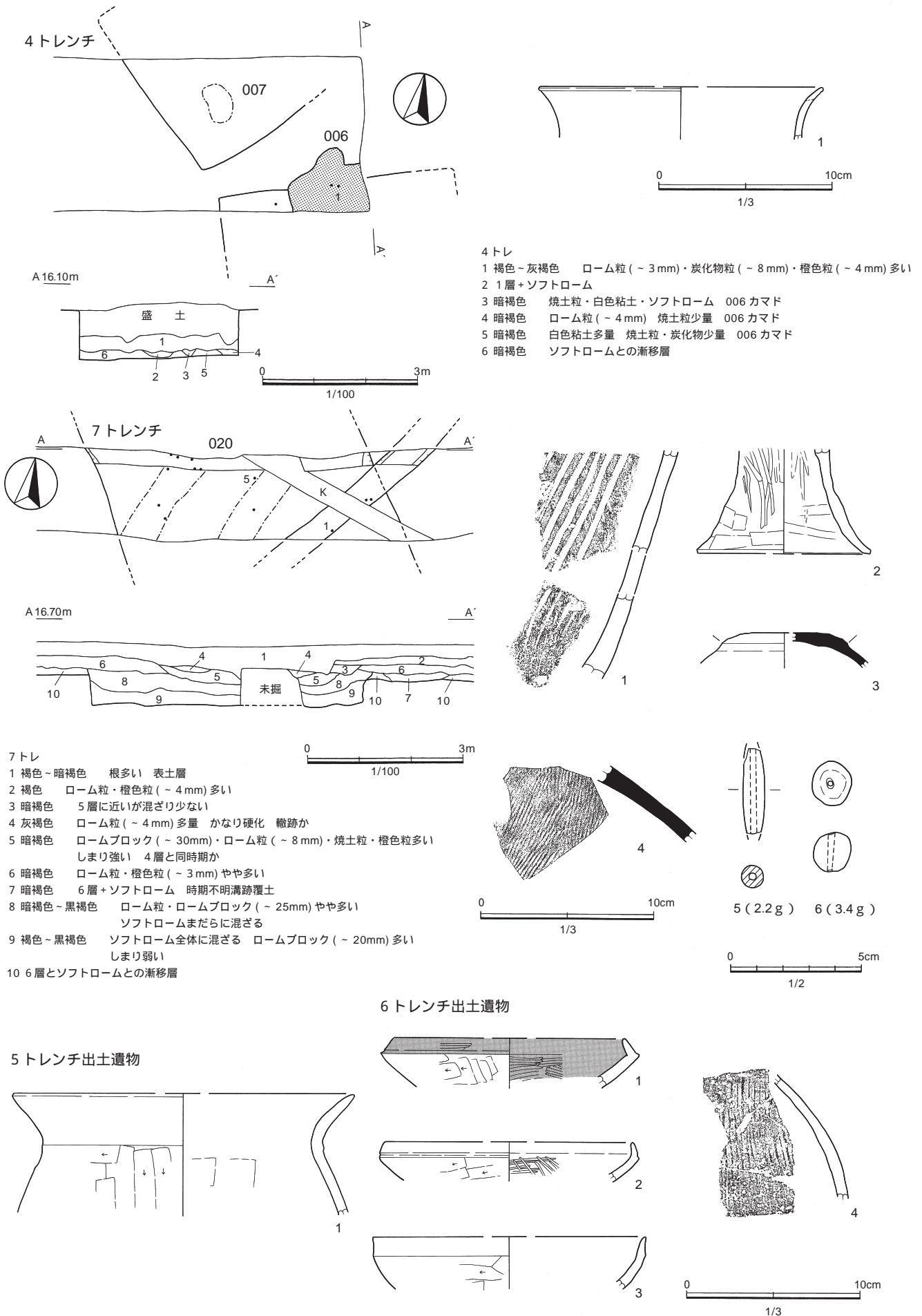
第12図 椎津向原遺跡 全体図

椎津向原遺跡



第13図 2・3トレンチ実測図及び出土遺物

椎津向原遺跡



第14図 4・7トレンチ実測図及び出土遺物、5・6トレンチ出土遺物

遺構と遺物 1・2トレンチは造成盛土が現地表から1.5mと厚く、本来は北の谷に落ちていく緩斜面部分にあたる。1トレンチでは遺構は確認されなかった。2トレンチ001竪穴建物の覆土は造成の影響を受けており、確認面から床面までの深さは8cm前後であった。サブトレンチで確認した床面範囲は、ほぼすべて硬化面であり、床面標高は13.87mである。東壁寄りに焼土や白色粘土、炭化物が集中し、遺物も多く出土している。3トレンチは002・003・004竪穴建物跡3軒が重複し、それらを切る形で奈良・平安時代と推定される005溝跡を確認した（図版3）。溝跡は最大幅80cm、深さ17.2cmを測り、N-78°-Wの方向に走る。5トレンチでも同規模の010溝跡を確認した（下写真）。010溝跡は近世～近代の溝跡と重複しており、延伸方向にある6トレンチでは確認できなかった。005と010の関連性は判然としないが、2条の溝跡はほぼ平行しており、芯心間は11.5mである。

4トレンチ006のカマド部分は、甕形土器の口縁部が全周している状態を確認し、遺存状態の良さがうかがえる。土器は固定状態であったため、欠けた一部（第14図1）を採集するのみで現状保存とした。また、007はすでに床面が露出している状況であった。6トレンチ（第15図）は今回調査のなかで遺構密度が一番高く、8遺構を確認した。013・014・018竪穴建物跡には小規模のサブトレンチを入れて床面の硬化面を確認した。確認面での出土遺物は古墳時代後期のものが多く、外面にタタキを有する甕片（第14図4）もみられた。7トレンチ020は西側壁高70cm（床面標高15.11m）を測り、遺存度が良好である。確認面付近を時期不明の溝跡と近年の重機の轍によるものと推測される硬化面が横切っている。このトレンチでは今回調査で唯一縄文時代の土器片（第14図1）が出土しており、近隣地域での分布が予想される。7トレンチ東端では019竪穴を確認し、床面標高は15.13mであり、壁高は46cmほどである。高坏脚部（第14図2）が出土している。

8トレンチ021竪穴の確認面では、青銅製の耳環（第16図1）が出土した。遺構の平面プランがややいびつに歪んで確認されたが、74cm下（床面標高15.78m）で平坦な硬化面を確認した。遺構の実際の掘り込み面は更に上層であり、ソフトローム面より30cmほど高い面まで遺構覆土が残存しているものとみられる。今回の調査で最も深い竪穴である。西隣に022竪穴の硬化面を確認したが、配管工事によってかなりの部分を壊された状態であった。トレンチ北壁面土層からみて、022竪穴も確認面は021とほぼ同レベルである可能性が高い。また、8トレンチからは鉄滓17点152.7gが出土しているが時期は不明である。

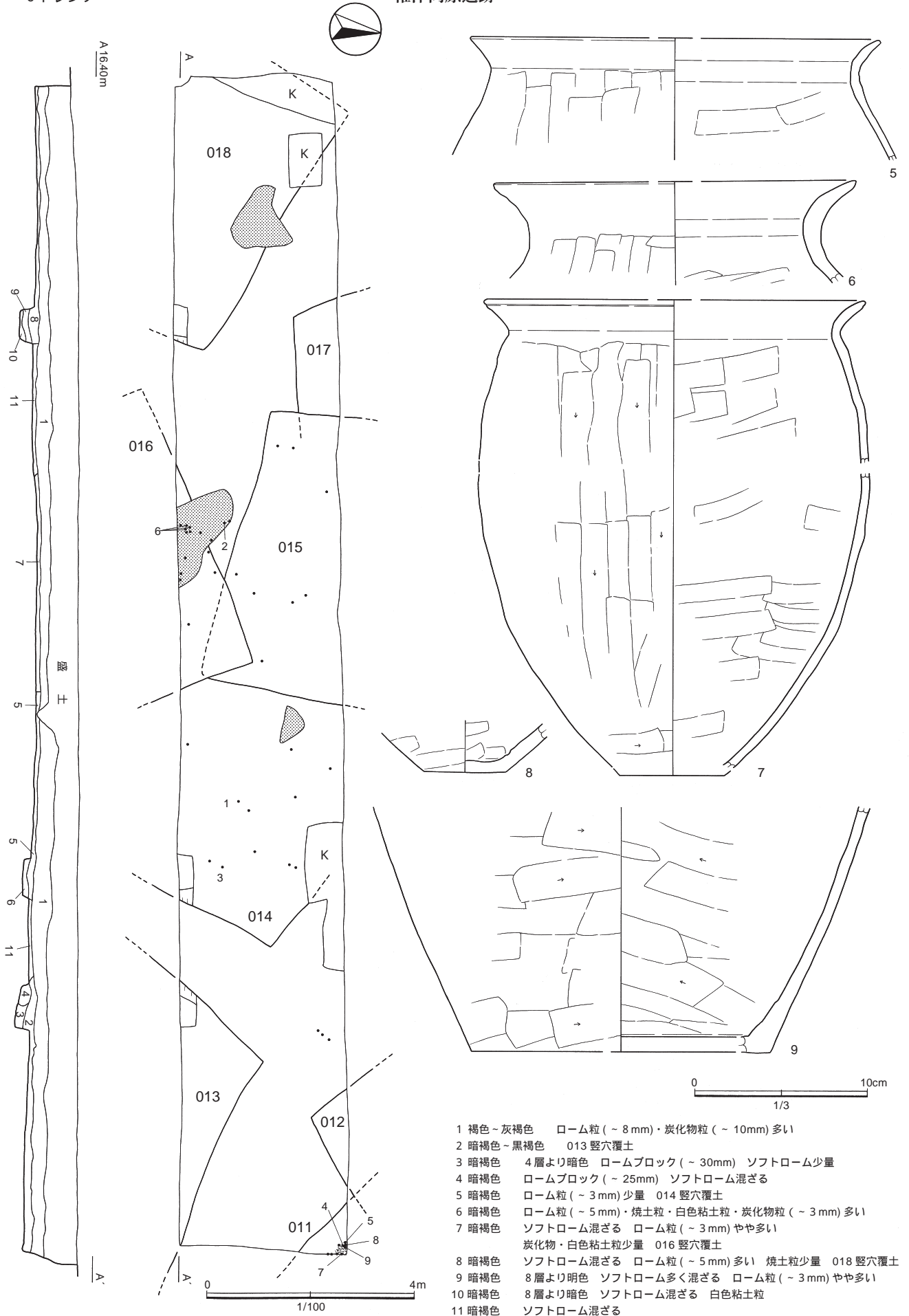
9トレンチは数基のピット及び土坑を確認したが、遺物も少なく、時期は判別できなかった。10トレンチの西半部分は、造成によってほぼ攪乱されており、東側もハードローム面までの削平を受けていたが、023溝跡と024土坑を確認した。023は出土遺物から平安時代の溝跡とみられ、溝の下層部分のみが残存している状態と考えられる。024土坑は遺物が少なく、時期は判断できなかった。茶ノ木遺跡や五霊台遺跡で顕著にみられた土錘は、2・7・10トレンチから土錘2点・土玉4点が出土している。



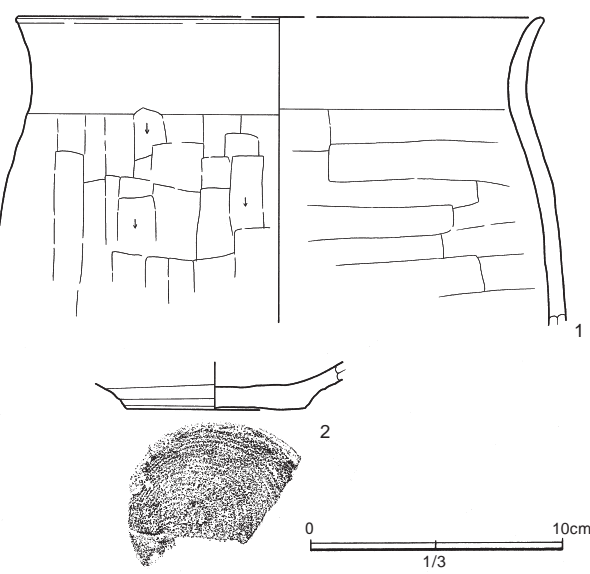
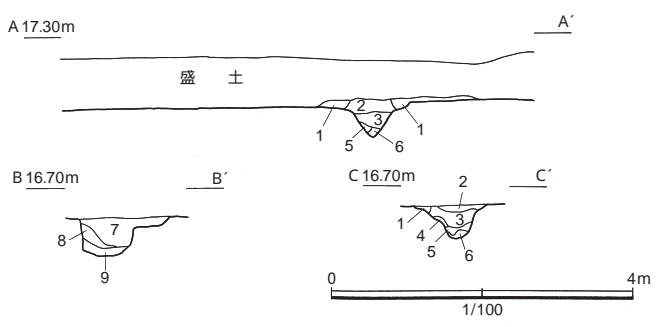
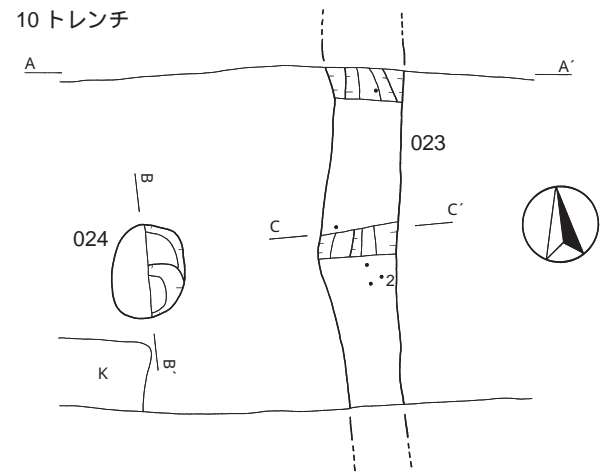
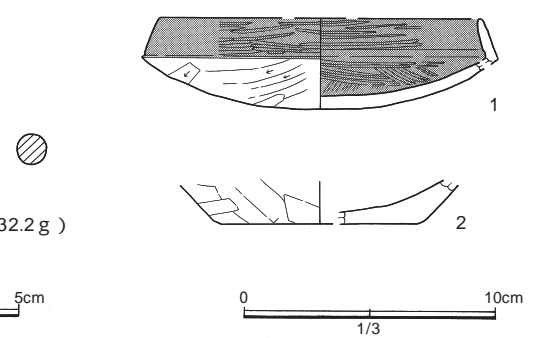
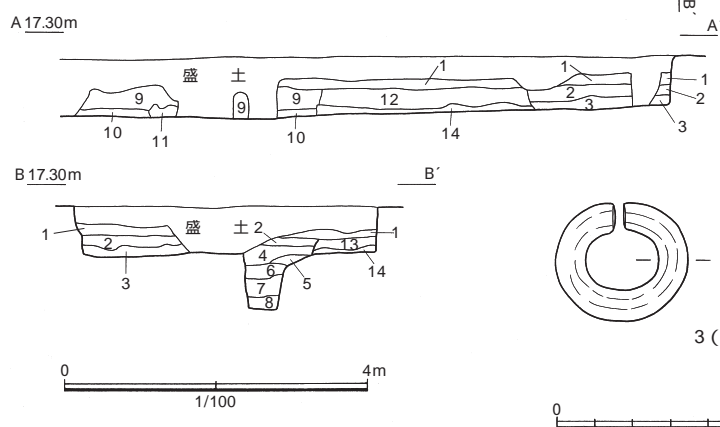
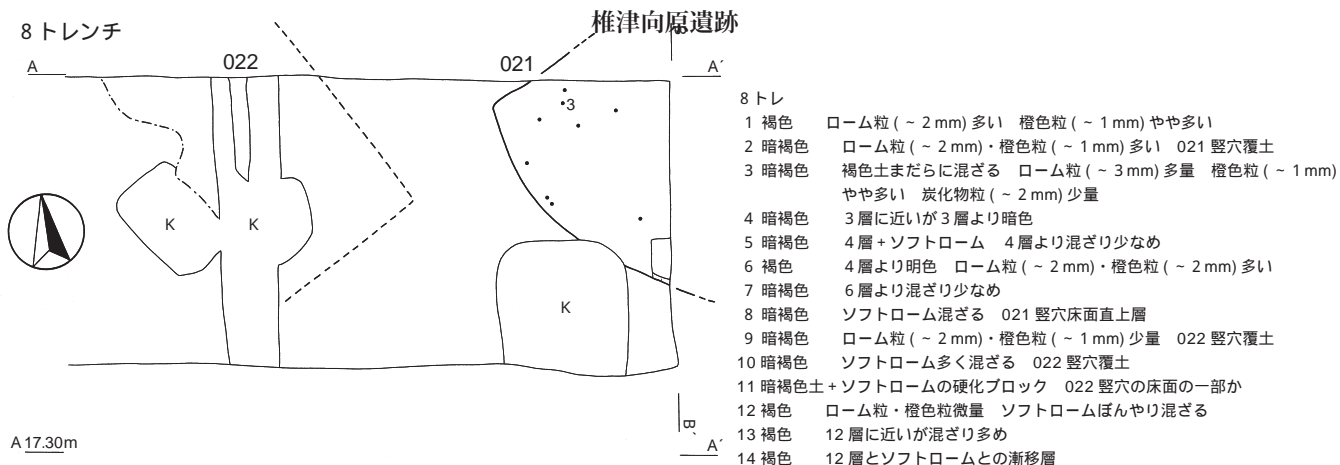
5 トレンチ 010 溝跡確認面
西から



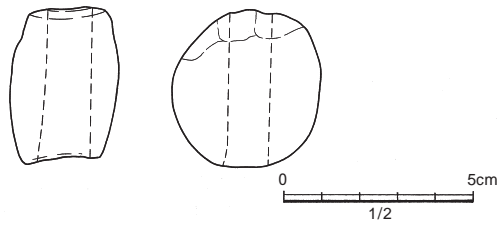
7 トレンチ 019 竪穴確認面
東から



第15図 6トレンチ実測図・出土遺物



- 10トレ
- | | |
|-------------------|--|
| 1 暗褐色 | ソフトロームを巻き上げている |
| 2 暗褐色 | ローム粒 (~ 3mm)・橙色粒 (~ 5mm) 多い しまり強い (盛土層造成時の圧力か) |
| 3 暗褐色 | ローム粒 (~ 5mm) 多量 |
| 4 褐色 | ソフトローム混ざる |
| 5 暗褐色 | 褐色土まだらに混ざる ローム粒 (~ 5mm) 多い |
| 6 暗褐色 (2層・3層より暗色) | ローム粒 (~ 5mm)・ソフトローム少量 しまり弱め |
| 7 暗褐色~黒褐色 | ローム粒・ロームブロック (~ 15mm) 多量 |
| 8 暗褐色 | 7層+ロームブロック (~ 40mm)+ソフトローム |
| 9 暗褐色 | 8層よりソフトローム多い |



第16図 8・10トレンチ実測図及び出土遺物

6 山新遺跡（第5地点）（遺構：図版4／出土遺物：図版9）

遺跡の位置 東京湾を西に望み、北東から南西方向へと延びる標高5～6mほどの砂堆列上に位置する。また、調査区は姉崎二子塚古墳の後円部墳丘裾から東側30mに位置し、その墳丘をとりまく地割りの形などから、この地点は周溝推定部分の隣接地であり、周溝外縁帯にあたと想定される部分である。そして、後円部墳丘から細くくびれて前方部へとつながる美しいラインの前方後円墳的景観を目の前に望める希少なビューポイントでもある。

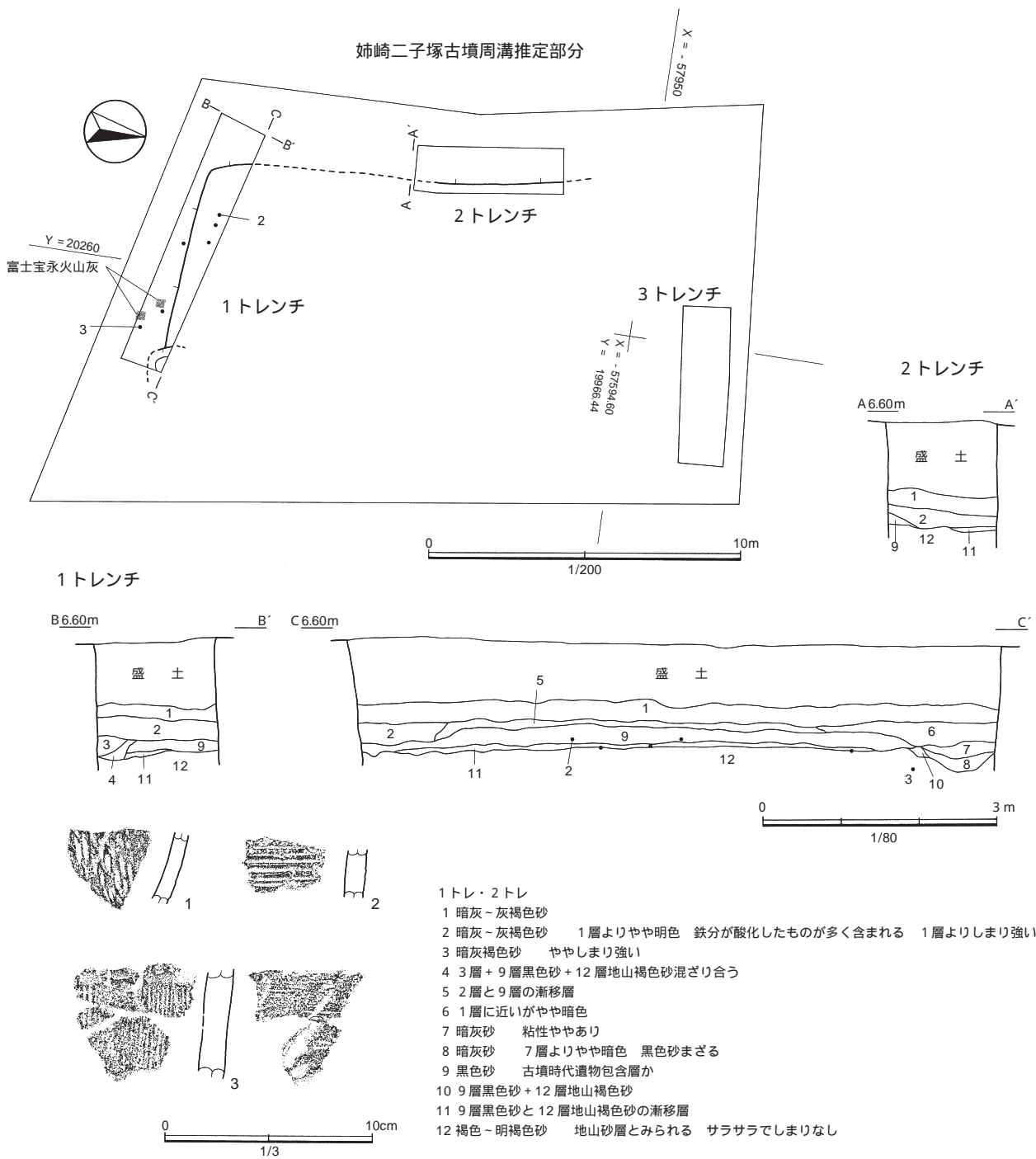
山新遺跡は、この砂堆上を中心にひろがっており、南北約1km、東西約1.1kmの広大な範囲を占める。椎津から八幡へと抜ける都市計画道路がこの砂堆を縦断するに先立ち、平成10年度から4回の調査がなされてきている。調査区南側30mほどの近接地における平成13年度に行った路線の確認調査では、古墳時代中期の円墳や集落跡などを確認している。

調査概要 個人住宅建設に先立ち確認調査を実施した。調査区はすでに80～100cmの盛土造成がなされていたため、現状は自然の高さではなく、本来の標高は5.5～5.8m前後とみられる。目の前に広がる周溝推定部分は調査区より一段低く湿地帯となっており、2トレンチ前の周溝部分の標高は5.3mほどであった。現状の盛土を含めない旧地形での比高差は20～30cmである。周溝推定部分との敷地境界ライン上には、コンクリート壁で崩落防止策がなされている。

トレンチの掘削に際しては、標高5.3m以下に下げた部分では水が湧き出たため、ポンプで汲み上げながら調査を行った。1・2トレンチは二子塚古墳の周溝を意識して設定したが、結果として従来の推定通り周溝は確認されず、近世の造成痕跡のみが検出された。下図第17図内では、近隣における市内遺跡事業での平成17・18年度の確認調査地点を示しており、共に周溝内の調査である。



山新遺跡（第5地点）



第18図 山新遺跡（第5地点）全体図、1・2トレンチ断面図、出土遺物

遺構確認面はこれまでの山新遺跡調査と同様、明褐色砂層である。しまりが弱く砂浜そのもののような状態であった。1トレンチと2トレンチで黒色砂のプランが確認され、遺構覆土と考えサブトレンチ調査を行った。想定とは反対の褐色砂部分が遺構覆土であり、地山褐色砂の直上に水平堆積した黒色層（古墳時代遺物包含層）を掘り込んだものであった。2トレンチでは西側に、1トレンチでは西及び南に掘り込まれており、その覆土の2層・3層中（レベル5.1m前後）に富士宝永火山灰（1707年降灰）を確認した。平面形状から、地形に沿った整形痕跡とみられる。1トレンチ東隅に土坑状の掘り込みが土層断面で確認されたが、時期は地形の整形時、もしくはさらに新しいものと思われる。出土遺物は古墳時代土師器、埴輪のほか、縄文・弥生土器、須恵器などの小破片がみられた。

7 山木遺跡群市道地区 (遺構：図版5／出土遺物：図版6・9・10)

遺跡の位置 八幡の海岸線から2.1km南東の台地上で、標高は20～25m前後を測る。北西140m付近では、昭和41年に若宮団地の造成に先立ち、若宮遺跡A区として近世の塚2基と古墳時代前期の竪穴建物跡の一部が調査されている。造成によってその台地の北半が大規模に削平された結果、調査区から25m北側は断崖となった。眼下に広がる若宮一丁目との現比高差は11.4mである。字名は「いちみち」と読む。西方450mには独立丘陵を利用した中世戦国期の白船城跡があり、さらにその西側には市原条里制遺跡がひろがる。白船城跡における昭和61年の調査では、中世に限らず弥生時代の竪穴建物跡3軒、奈良・平安時代の竪穴建物跡10軒を検出している。10世紀後半の遺物が主体のなかで9世紀代の緑釉陶器碗が出土するなど、今回の調査に共通する要素を持っており興味深い。また、南東に370mほどの山木深堀遺跡では、平成4年度の確認調査において平安時代の竪穴建物跡2軒と地下式横穴墓2基を検出している。また、昨年度にも東南東550mの出戸地区において確認調査を実施し、平安時代の竪穴建物跡2軒を確認しており、周辺は平安時代の遺跡分布が色濃い地域と言える。このことは、山木遺跡群南側の谷を隔てた対岸一帯に広がる郡本遺跡群（上総国府推定地）の存在と無関係ではないであろう。

調査概要 個人住宅建設に起因する確認調査を実施し、浄化槽部分（1トレンチ）については本調査とした。トレンチは母屋の基礎を避ける形で設定した。地形は西側の谷に向かう緩斜面であり、敷地

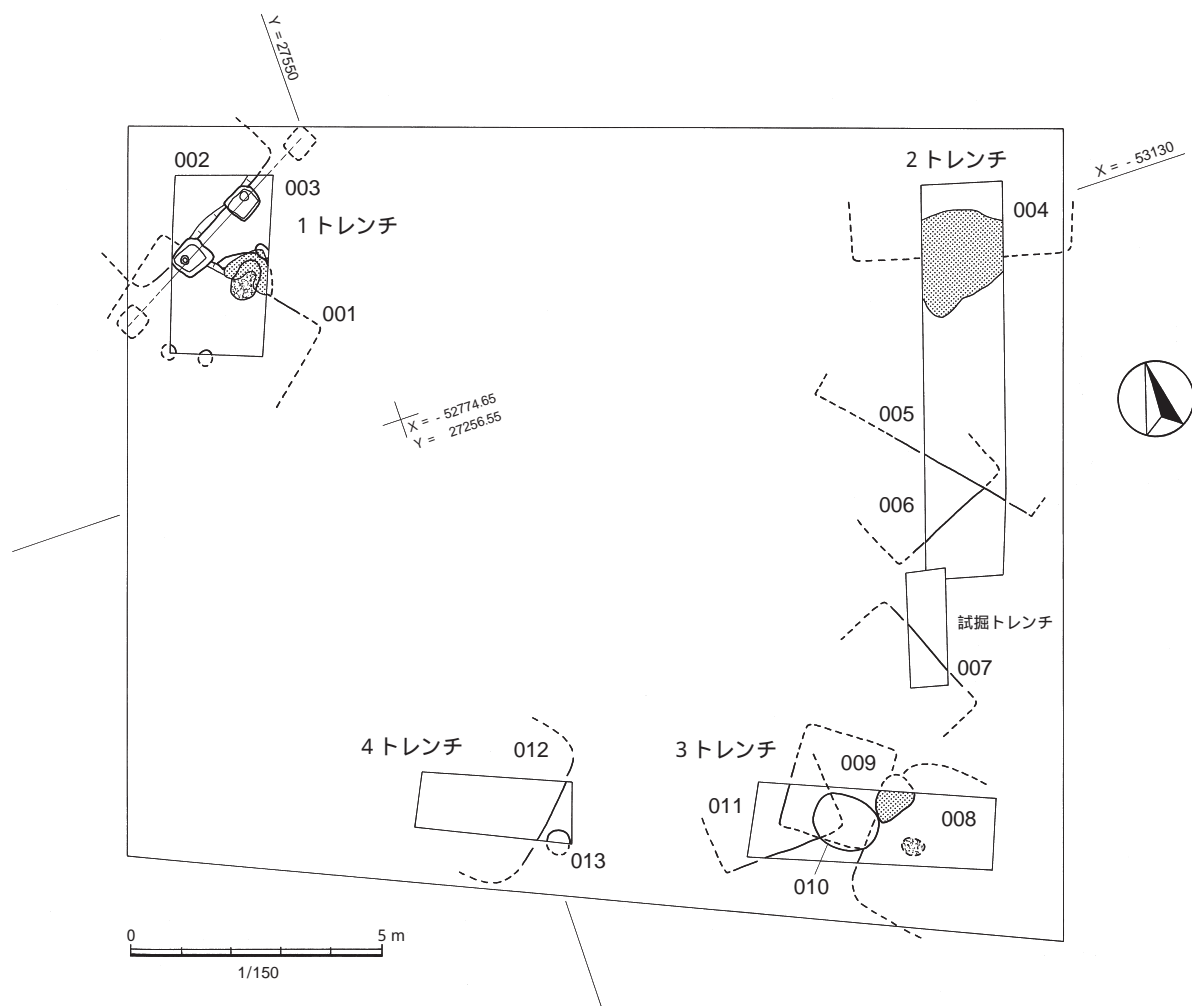


(市原市基本図1 / 2500、昭和55年測図)

第19図 山木遺跡群周辺地形図

0 200 m
(1 / 5,000)

山木遺跡群市道地区



第20図 山木遺跡群市道地区 全体図

内の東半を削り取り、西半の低い部分を埋めることで水平とした経緯があるようにみられた。そのため、2トレンチ周辺では、ソフトローム面が現地表にほぼ露出している状態であった。調査区内の現地表面標高は22.7m前後である。

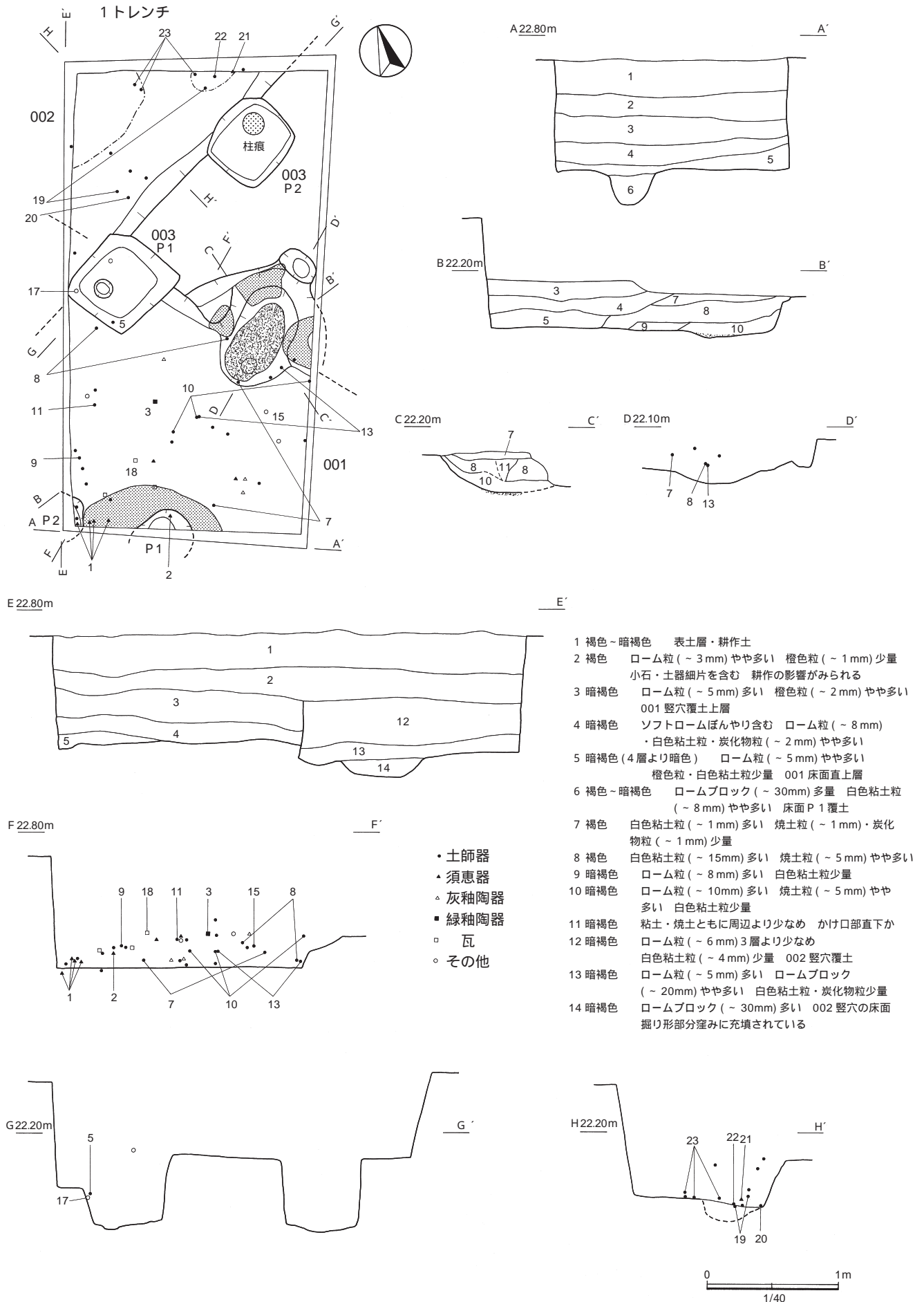
調査の結果、弥生時代後期の竪穴建物跡2軒（008・012）、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒（005）、平安時代の掘立柱建物跡1棟（003）・竪穴建物跡7軒・土坑1基（010）を確認した。遺構の重複が多くみられ、特に平安時代の遺構密度は高い状況と考えられる。

遺構と遺物 1トレンチでは、001・002竪穴建物跡と003掘立柱建物跡の柱穴2基が重複しており、2軒の竪穴が重なる部分に003P1が掘り込まれていた。そのトレンチ面積に比して、極めて入り組んだ状況であった。

001竪穴建物跡は北東壁にカマドを有し、主軸方位はN-49°-Eと推定される。カマドは右側ソデの一部を除いてほぼ全容を検出した。カマドの掘り形は、楕円形の焚き口にピット状の煙出し部が附属し、長軸は1.13mを測る。カマド構築土と推定される残存部位に白色粘土は必ずしも多くないが、周辺に顕著に飛散している状況もみられなかった。カマド部位出土の遺物は高台付坏や甕(第22図7・8・13)があげられ、これらは廃絶時期に近いものと考えられる。

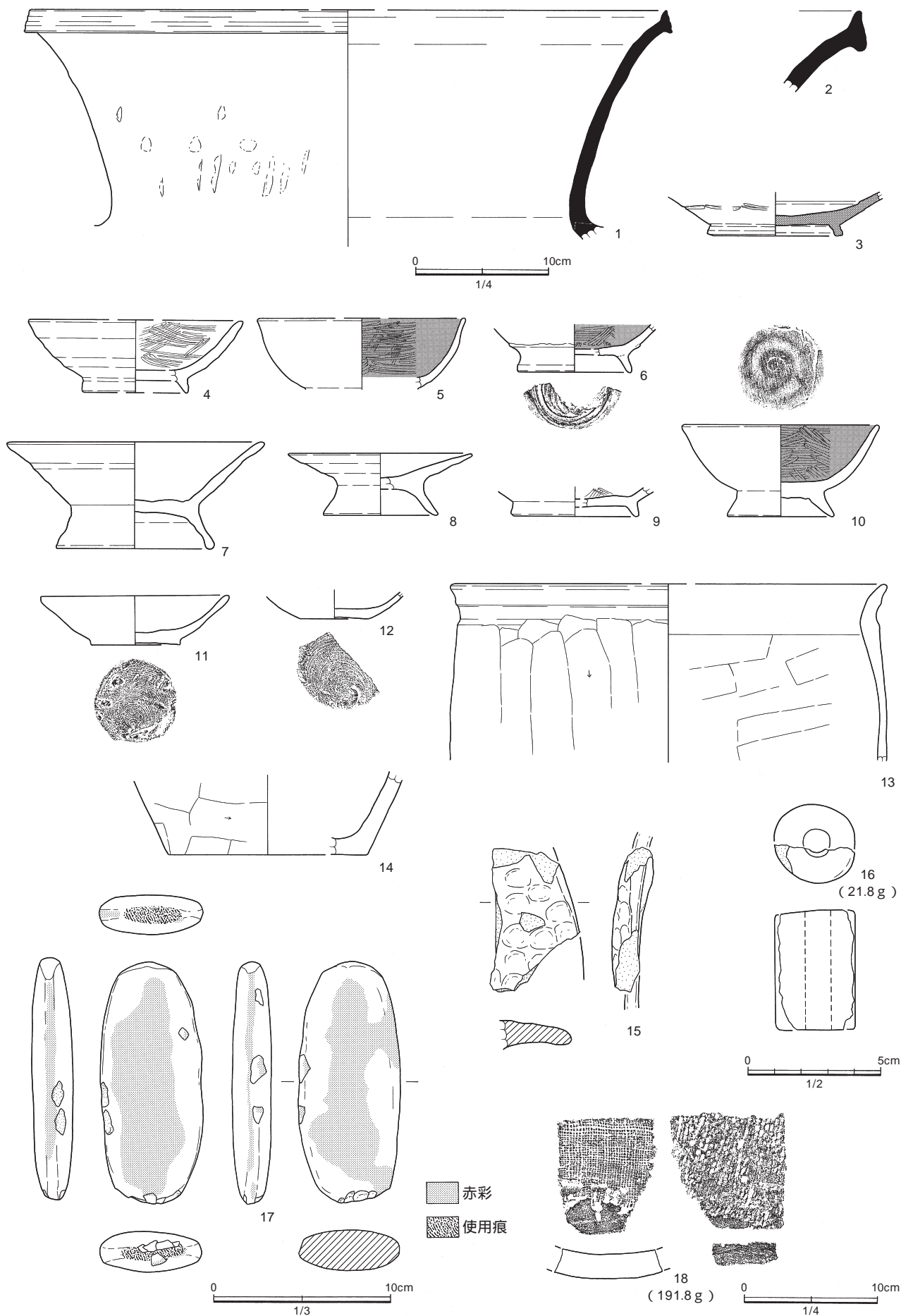
床面は、ほぼ掘り形のハードロームを利用した硬化面であり、床面標高は21.77mである。カマド左脇の壁高は20.4cmであり、壁周溝は確認されなかった。柱穴も確認されず、トレンチ外にあると

山木遺跡群市道地区



第21図 1トレンチ実測図

山木遺跡群市道地区



第22図 1トレンチ出土遺物

みられる。南端に二つのピットを検出し、P1は検出長軸43.0cm、床面からの深さ26.8cmを測り、北半分ほどを調査した。ピットの周囲に白色粘土が敷かれており、粘土は床面上に付着し、ハードロームと混ざり硬化していた。白色粘土は、肉眼観察の限りではカマドの構築材と同様のものとみられる。P2はトレンチ南西隅に部分的に検出された。調査した深さは8.0cmであるが、覆土に第22図1の須恵器大甕片の一部を含んでいた。

床面及び覆土中からの出土遺物には、新旧含まれている。第22図3の緑釉陶器が覆土上層から出土しており、4～12の坏・椀類とは時期差がみられる。8の高台付皿や11・12の小ぶりな坏をみると、10世紀末頃の年代観があてはめられよう。他に、15の置きカマド底部分、16の土錘、18の布目瓦など、多様な遺物がみられた。灰釉陶器の小片も出土している。

002竪穴建物跡についてはさらに部分的な調査であり、規模や主軸方向は不明である。竪穴の掘り形は、周囲の壁付近を深く掘り窪めるタイプであり、その窪みに暗褐色土とロームブロックの混ざった土層を充填している。壁高は36.6cmを測り、床面標高は21.69mである。出土遺物は第23図19～24であり、19・20・22・23が床面付近の出土である。22と23はともに9世紀前半頃の所産とみられる。

001と002の新旧関係は、トレンチ西壁E-E'セクションの土層観察によって、002が新しく掘り込まれた竪穴であると調査時点では判断した。しかし、出土遺物をみると、001の覆土及び床面付近には10世紀後半の遺物が多く含まれており、002出土遺物より明らかに新しいものであった。土層断面の分層的には、ちょうど002竪穴の壁が立ち上がる部分に001竪穴との境界があるため、新旧どちらにも解釈できる状態とみることも可能である。

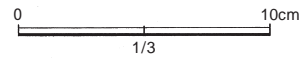
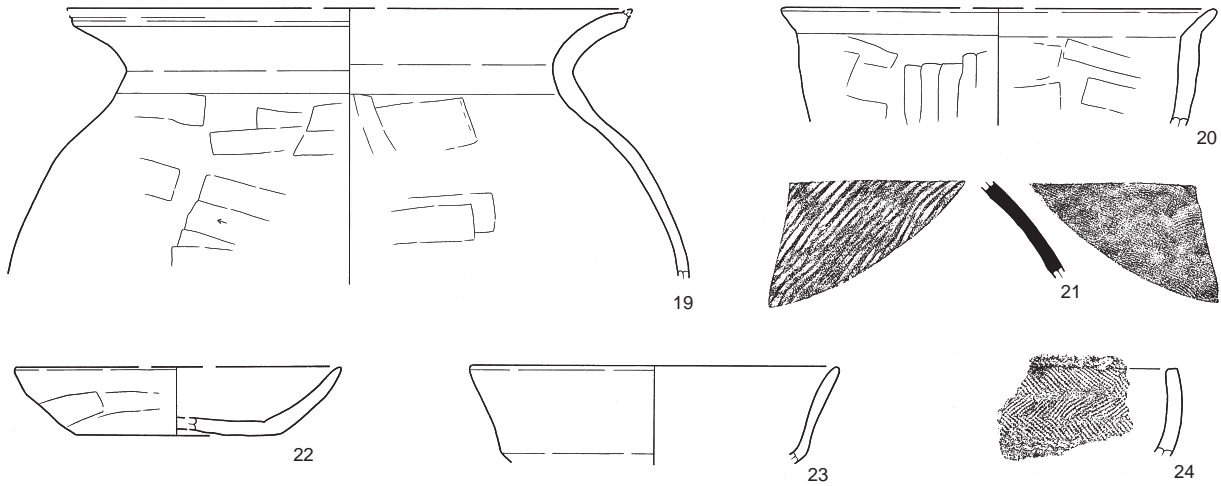
003掘立柱建物跡の二つの柱穴は、N-59°-E方向に並ぶ。001・002竪穴の覆土を切る形で掘り込まれていた。P1は長軸0.67m・短軸0.63m・深さ53.6cmであり、平面形状は隅丸長方形である。覆土はロームブロックを多量に含む暗褐色土であり、底面において小円形状の窪みはあるものの、柱痕や柱アタリは確認されなかった。P2は長軸0.61m・短軸0.57m・深さ59.0cmであり、平面形状はP1より幾分丸みを帯びる。覆土はソフトロームを多く含む褐色土が主体であり、覆土上半部分においては黒褐色の柱痕を確認できたものの、底面では柱アタリは確認されなかった。P1の底面凹みとP2の柱痕の柱間寸法は1.71mである。003P1の出土遺物として、第22図5の内面黒色ミガキの椀と17の赤彩された石製品があげられる。17の石製品は表面を滑らかに研磨し、赤彩が施される。表面の風化面は灰白色を呈し、両端部には使用した痕跡が認められ暗灰色であり、石器に使われるいわゆる安山岩トロトロ石のようである。その使用痕や縁辺部の欠け口の中にも赤彩が入り込む様子が観察されるため、縄文時代の敲石を入手し再利用した可能性も考えられる。

1トレンチのその他の遺物として、鉄滓3点366.4gが覆土上層より出土している。うち1点は椀型滓(222.2g)であり、003P1の覆土上層で確認された。

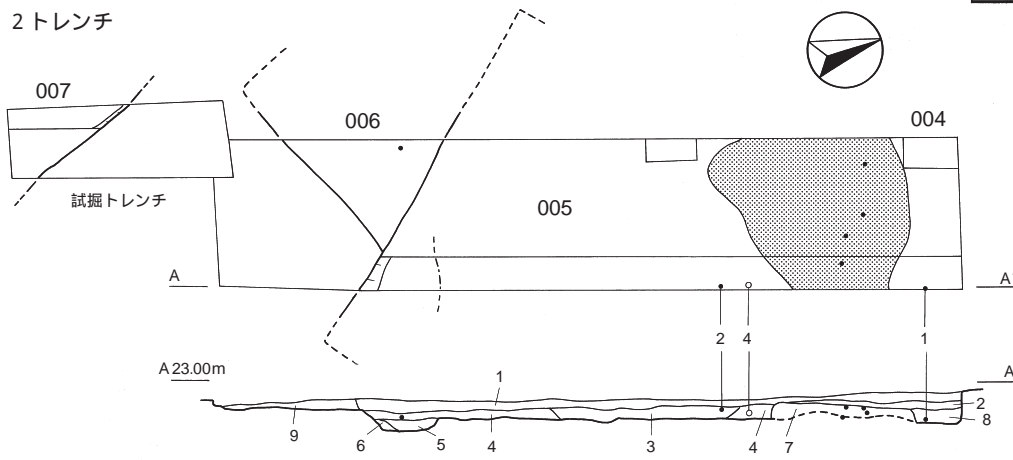
2トレンチでは3軒の竪穴建物跡を確認した。そのうち004・005竪穴は、サブトレンチを入れて硬化した床面を確認した。その出土遺物(第23図2～4)からみて、005竪穴は古墳時代前期のものであり、004竪穴との間に確認された白色粘土の分布は、004竪穴のカマドが崩壊した状態であろうと推定した。また、2トレンチ南側には、今回調査に先立ち教育委員会ふるさと文化課が試掘した際の小トレンチがあり、007竪穴建物跡1軒を確認している。出土遺物は土師器の小片のみだが、平安時

山木遺跡群市道地区

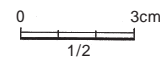
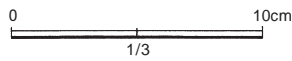
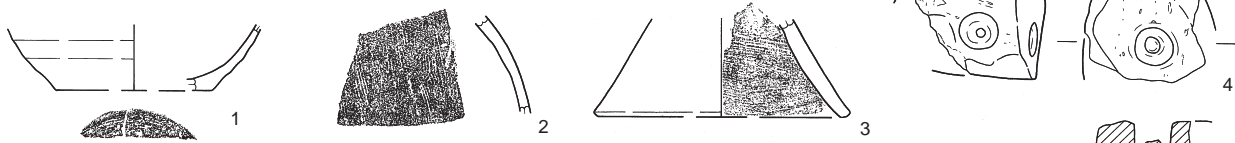
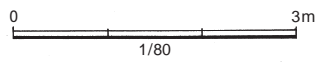
1 トレンチ 002 出土遺物



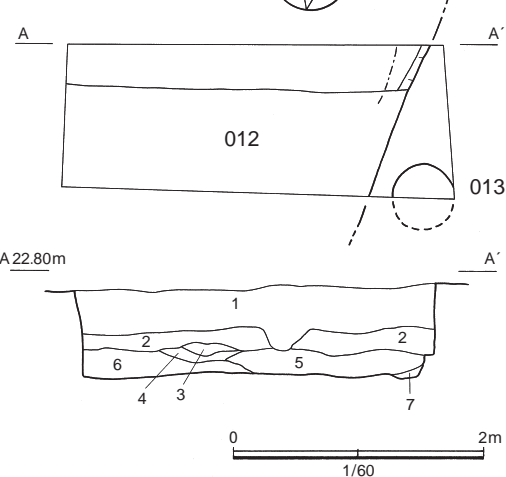
2 トレンチ



- 2 トレ東壁
- 1 表土層 耕作等の影響を受けている
 - 2 灰褐色 耕作等の影響を受けている
 - 3 褐色 根による攪乱が激しい
 - 4 暗褐色 ローム粒 (~ 8 mm) 多い
 - 005 竪穴覆土
 - 5 暗褐色 ソフトローム多い
 - 005 壁周溝部覆土
 - 6 暗褐色 5層よりソフトローム多い
 - 005 南西壁際覆土
 - 7 褐色 白色粘土粒・焼土粒多量
 - 004 竪穴のカマド構築土が崩れた部分
 - 8 暗褐色 ローム粒 (~ 8 mm) を含む
 - 004 竪穴覆土
 - 9 褐色 ソフトローム ほぼ現地表に露出している

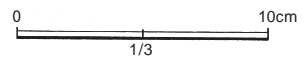


4 トレンチ



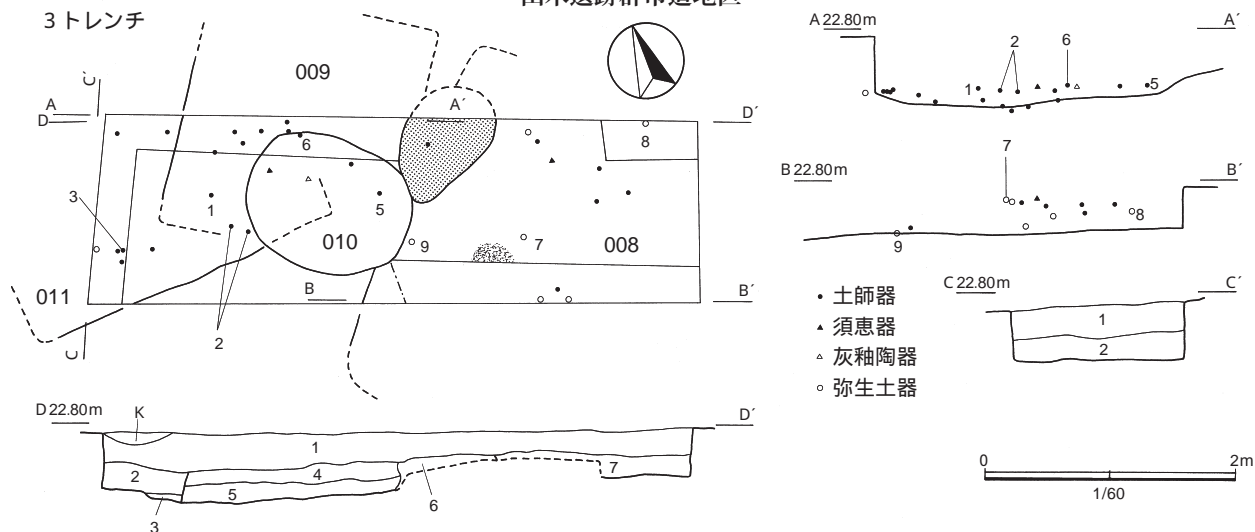
4 トレ北壁

- 1 明褐色 表土層 耕作の影響を受けている
- 2 褐色 混ざり少ない
- 3 褐色 焼土多く混ざる 近世前後の焚き火跡か
- 4 褐色 焼土やや多く混ざる 3層の下層
- 5 暗褐色 ソフトローム含む 012 竪穴覆土
- 6 暗褐色 5層よりソフトローム多い 012 覆土
- 7 暗褐色 5層よりソフトローム多い 012 壁周溝部覆土



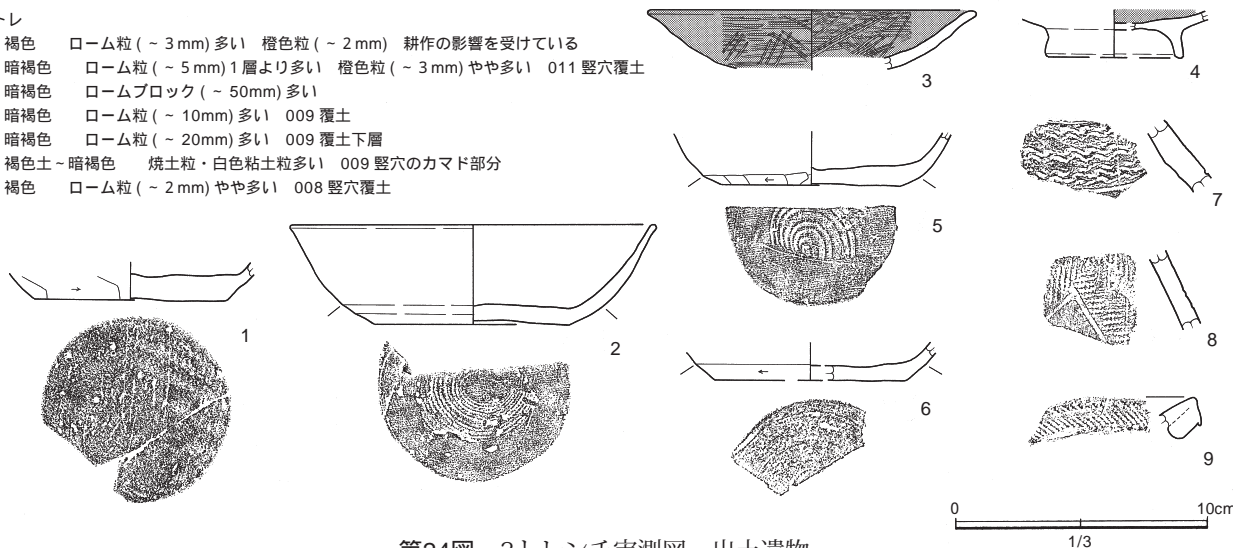
第23図 1トレンチ出土遺物、2・4トレンチ実測図及び出土遺物

山木遺跡群市道地区



3トレ

- 1 褐色 ローム粒 (~ 3mm) 多い 橙色粒 (~ 2mm) 耕作の影響を受けている
- 2 暗褐色 ローム粒 (~ 5mm) 1層より多い 橙色粒 (~ 3mm) やや多い 011 竪穴覆土
- 3 暗褐色 ロームブロック (~ 50mm) 多い
- 4 暗褐色 ローム粒 (~ 10mm) 多い 009 覆土
- 5 暗褐色 ローム粒 (~ 20mm) 多い 009 覆土下層
- 6 褐色土・暗褐色 焼土粒・白色粘土粒多い 009 竪穴のカマド部分
- 7 褐色 ローム粒 (~ 2mm) やや多い 008 竪穴覆土



第24図 3トレンチ実測図・出土遺物

代の竪穴と推定される。

3トレンチは遺構の切り合いが激しく、3軒の竪穴建物跡と1基の土坑を確認した。008竪穴は、硬化した床面と部分的な焼土を検出した。床面標高は22.41mである。出土遺物は小片(第24図7~9)のみだが、弥生時代後期の竪穴とみられる。009竪穴と011竪穴の切り合い関係は微妙であり、サブトレンチで確認した硬化面と土層断面から平面プランを推定した。床面標高は009竪穴が22.21m、011竪穴は22.27mである。010土坑は、長軸1.32m、短軸1.03mを測る楕円形である。確認面での平面プランは明瞭であり、他の竪穴が埋まった跡に掘り込まれたものと観察された。土坑の覆土上面で時期を判断できる遺物を検出し、遺構遺存度の高さが推測されたため、確認面までの調査に留めた。

これら遺構の出土遺物をみると、009竪穴とみられる確認面から第24図2の底径が大きめの坏が出土している。底部は回転糸切り後、周辺部分のみ手持ちヘラケズリを施す。また、010土坑出土の5は底部片だが、2と同様の特徴を有し、調査区内の平安時代遺構のなかでは古めの様相を呈する。一方、3の内外面黒色ミガキを施した皿片が011竪穴覆土より出土している。

4トレンチは竪穴建物跡1基とピット1基を確認した。012竪穴はサブトレンチ調査によって硬化した床面を確認した。床面標高は21.96m、壁高は18.0cmである。出土遺物は小片だが弥生時代後期のものが多くみられた。013ピットは確認面のみで掘り下げなかった。

出土遺物観察表

8 出土遺物観察表 (計測単位はcm)

郡本遺跡群 (第84次)

トナリ	遺跡番号	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土	焼成	色調	調整	その他
	1-001	1 土師器	杯	127	1/2	5.6	1/1	3.9	砂灰 (- 3mm) 多い・石灰・骨針少量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	2 土師器	杯	166	3/4	6.6	1/1	6.5	砂灰 (- 1mm)・石灰・骨針少量	良好	暗褐-黒	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	床面に伏せられて出土
	1-001	3 土師器	杯	122	4/5	5.6	1/1	4.3	赤色灰 (- 1.5mm)・石灰・骨針少量	やや白い	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	4 土師器	杯	124	2/3	5.7	1/1	5.3	赤色灰 (- 1mm)・骨母・骨針少量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	5 土師器	杯	143	1/3	6.2	1/1	5.0	赤色灰 (- 2mm)・骨母・骨針多量	やや白い	暗褐-黒	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	内面の黒色は黒色している
	1-001	6 土師器	杯	128	1/2	(6.2)	1/4	(2.4)	赤色灰 (- 2mm)・骨母・骨針多量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	7 土師器	腰	(180)	1/4	(5.8)	1/4	(2.4)	赤色灰 (- 1mm) 多い・石灰少量	良好	赤褐-暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	8 土師器	腰	(198)	1/4	(21.6)	1/4	(20.2)	赤色灰 (- 1mm) 多い・石灰少量	良好	暗褐-暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	3-001	1 須置器	瓶					(14.0)	灰白・緑	良好	灰白・緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	頸部片 広口部欠
	4-002	1 須置器	瓶						灰白・緑	良好	灰白・緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	4-002	2 須置器	瓶						灰白・緑	良好	茶褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	常滑窯産

郡本遺跡群 (第10次)

トナリ	遺跡番号	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土	焼成	色調	調整	その他
	1-001	1 土師器	杯	(138)	1/6	6.8	1/5	3.1	砂灰 (- 1mm)・白色灰 (- 0.5mm) 多量	良好	暗褐-黒	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	2 須置器	腰						灰白・緑	良好	明灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-003	3 須置器	腰						赤褐色 緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	4 須置器	腰						明褐色 緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	瀬美窯産
	1-001	5 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	常滑窯産
	1-003	7 石埴物	五輪形埴輪					16.0	灰白・緑	良好	茶褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	12.2kg 安山岩
	2-007	2 須置器	外蓋					(2.7)	明灰・緑	良好	灰-暗灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	体蓋ツマミ部分
	2-005	4 須置器	外蓋			(8.6)	1/4	(15.2)	灰・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	体蓋ツマミ部分
	2-004	5 須置器	杯	(152)	1/4			(5.9)	灰・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	体蓋ツマミ部分
	2-004	6 須置器	杯						灰・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	体蓋ツマミ部分
	2-005	7 土師器	腰	(140)	1/8	(7.2)	1/4	4.5	赤色灰 (- 0.5mm)・石灰・骨針少量	やや白い	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	体蓋ツマミ部分
	2-007	8 在土土器	カマコ川	8.2	1/1	5.8	1/1	2.1	赤色灰 (- 2mm)・骨母多量	良好	明褐-緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	底にアタロ痕あり
	2-007	9 在土土器	カマコ川	8.2	1/1	5.2	1/1	2.0	赤色灰 (- 1mm)・骨母多量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	底にアタロ痕あり
	2-007	10 在土土器	カマコ川	8.2	1/1	4.8	1/1	2.3	赤色灰 (- 1mm)・骨母・骨針少量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	底にアタロ痕あり

郡本遺跡群 (第11次)

トナリ	遺跡番号	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土	焼成	色調	調整	その他
	1-001	1 灰釉陶器	皿		1/16	9.6	1/3	(2.7)	灰・緑	良好	灰白	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	1-001	2 灰釉陶器	瓶					(3.1)	灰・緑	良好	灰-暗灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	底部中央に穿孔か
	1-001	3 灰釉陶器	瓶						灰・緑	良好	茶褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	常滑窯産
	2-002	1 灰釉陶器	楕	(8.0)	1/4	(8.0)	1/4	(3.5)	灰白・緑	良好	灰白・緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	内面に緑
	2-002	2 灰釉陶器	楕	(10.2)	1/2	(10.2)	1/2	(2.6)	灰白・緑	良好	灰白・緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	楕に光沢なく取っ手跡 使用痕か
	2-002	3 須置器	腰	(37.0)	1/8			(6.2)	灰・緑	良好	暗灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	割れ口周縁部損傷 砥石として使用か
	2-002	4 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰白	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	5 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰白	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	6 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	7 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	8 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	9 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	10 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	11 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	12 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	13 須置器	腰						灰白・緑	良好	灰	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-002	14 在土土器	柱状土師器						明灰・緑	良好	明灰・緑	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	割れ口周縁部損傷 砥石として使用か
	2-002	15 須置器	腰						灰白・緑	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	常滑窯産 裏の肩部
	2-002	16 須置器	腰						灰白・緑	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	北条鉢 初辨 1094年 篆書体
	4-006	1 須置器	腰					2.48	赤色灰 (- 0.5mm) 少ない	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	常滑窯産
	10-001	1 須置器	腰						赤色灰 (- 0.5mm) 少ない	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	酸化燻焼
	10-001	2 須置器	腰						赤色灰 (- 0.5mm) 少ない	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	内外面(特に内面)緑色が残存 使用痕か
	10-001	3 須置器	腰						赤色灰 (- 0.5mm) 少ない	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	割れ口周縁部損傷 砥石として使用か
	10-001	4 須置器	腰						赤色灰 (- 0.5mm) 少ない	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	割れ口周縁部損傷 砥石として使用か
	10-001	5 土師器	杯						赤色灰 (- 1mm)・骨母・骨針少量	良好	暗褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	焼成後穿孔 粉置器に転用か

椎津白旗遺跡

トナリ	遺跡番号	種別	器種	口径	口径残存	底径	底径残存	最大径	器高	胎土	焼成	色調	調整	その他	
	2-001	1 土師器	杯	142	1/3	14.4	(4.0)	14.4	(4.0)	赤色灰 (- 1mm)・骨母・骨針少量	良好	暗褐-暗黄褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	
	2-001	2 土師器	杯	136	1/2	13.6	(2.9)	13.6	(2.9)	赤色灰 (- 1mm)・骨母・骨針少量	良好	暗褐-灰褐	調整	外面口周子・底部下縁手持ちへラケズリ・内面口周子	



郡本遺跡群8次 調査風景 南から



郡本遺跡群8次 1トレンチ001竪穴遺物出土状況 南から



郡本遺跡群8次 001竪穴遺物出土状況 南から



郡本遺跡群8次 001竪穴 南から



郡本遺跡群8次 3トレンチピット群 北から



郡本遺跡群8次 4トレンチ002土坑 東から



郡本遺跡群10次 調査風景 東から



郡本遺跡群10次 1トレンチ001溝跡 東から



郡本遺跡群10次 1トレンチ002掘立柱建物跡確認面 南から



郡本遺跡群10次 003土坑遺物出土状況 北から



郡本遺跡群10次 2トレンチ005竪穴遺物出土状況 西から



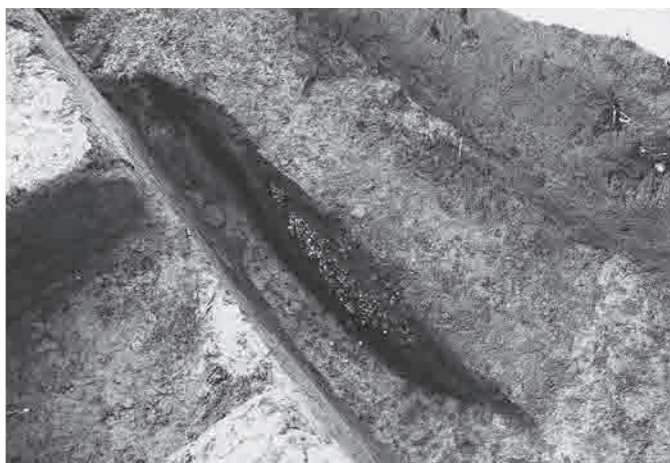
郡本遺跡群10次 2トレンチ007土坑貝層・遺物出土状況 西から



郡本遺跡群11次 調査風景 南から



郡本遺跡群11次 1トレンチ001台地整形跡 西から



郡本遺跡群11次 1トレンチ002土坑貝層 南から



郡本遺跡群11次 2トレンチ003井戸跡 南から



郡本遺跡群11次 3トレンチ004土坑・005溝跡 東から



郡本遺跡群11次 4トレンチ006台地整形跡 西から



郡本遺跡群11次 6トレンチ006台地整形跡 南から



郡本遺跡群11次 002井戸跡調査風景 南から



椎津向原遺跡 トレンチ配置状況 西から



椎津向原遺跡 2トレンチ 001竪穴遺物出土状況 南東から



椎津向原遺跡 3トレンチ 遺構確認面 西から



椎津向原遺跡 4トレンチ 006竪穴カマド部分 北西から



椎津向原遺跡 6トレンチ調査状況 南西から



椎津向原遺跡 7トレンチ020竪穴 南西から



椎津向原遺跡 8トレンチ021竪穴 遺物出土状況 東から



椎津向原遺跡 9トレンチ(右奥)・10トレンチ(手前) 東から



山新遺跡第5地点 奥が姉崎二子塚古墳後円部 南東から



山新遺跡第5地点 1トレンチ確認面 南東から



山新遺跡第5地点 2トレンチ確認面 南西から



山新遺跡第5地点 1トレンチ土層断面 南東から



山木遺跡群市道地区 調査風景 北から



山木遺跡群市道地区 1トレンチ001・002竪穴遺物出土状況



山木遺跡群市道地区 001竪穴・002竪穴 西から



山木遺跡群市道地区 001竪穴カマド部分 南から



山木遺跡群市道地区 1トレンチ003掘立柱建物跡 北西から



山木遺跡群市道地区 2トレンチ 南から



山木遺跡群市道地区 3トレンチ 西から



山木遺跡群市道地区 4トレンチ 南東から



郡本8次 1トレ1



郡本8次 1トレ2



郡本8次 1トレ3



郡本8次 1トレ4



郡本8次 1トレ5



郡本8次 1トレ6



郡本8次 1トレ7



郡本10次 1トレ7



郡本10次 2トレ8



郡本10次 2トレ9



郡本10次 2トレ10



郡本11次 1トレ2



郡本11次 2トレ1



郡本11次 2トレ1



郡本11次 2トレ2



郡本11次 2トレ2



郡本11次 2トレ14



椎津向原 2トレ1



椎津向原 2トレ2



椎津向原 2トレ3



椎津向原 2トレ4



山木 1トレ3



山木 1トレ3



山木 1トレ6



山木 1トレ7



山木 1トレ8



山木 1トレ9



山木 1トレ10



山木 1トレ23



山木 1トレ11



山木 1トレ14



山木 3トレ2

郡本遺跡群 (第8次)



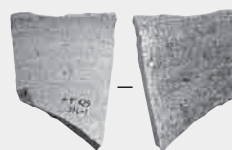
1トレ1



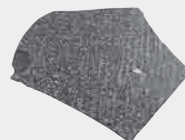
1トレ8



1トレ9



3トレ1



4トレ1



4トレ2

郡本遺跡群 (第10次)



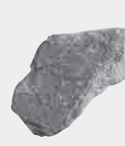
1トレ1



1トレ2



1トレ3



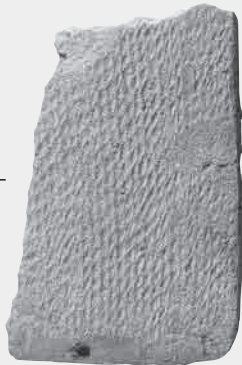
1トレ4



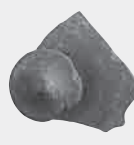
1トレ5



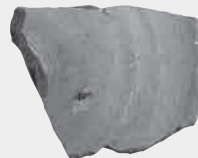
1トレ6



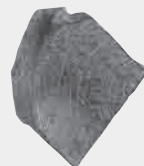
2トレ1



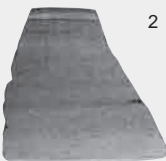
2トレ2



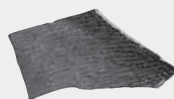
2トレ3



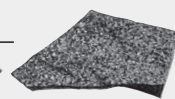
2トレ4



2トレ5



2トレ6



2トレ7



2トレ8



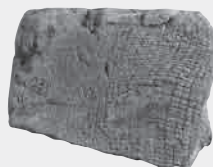
2トレ9



2トレ10



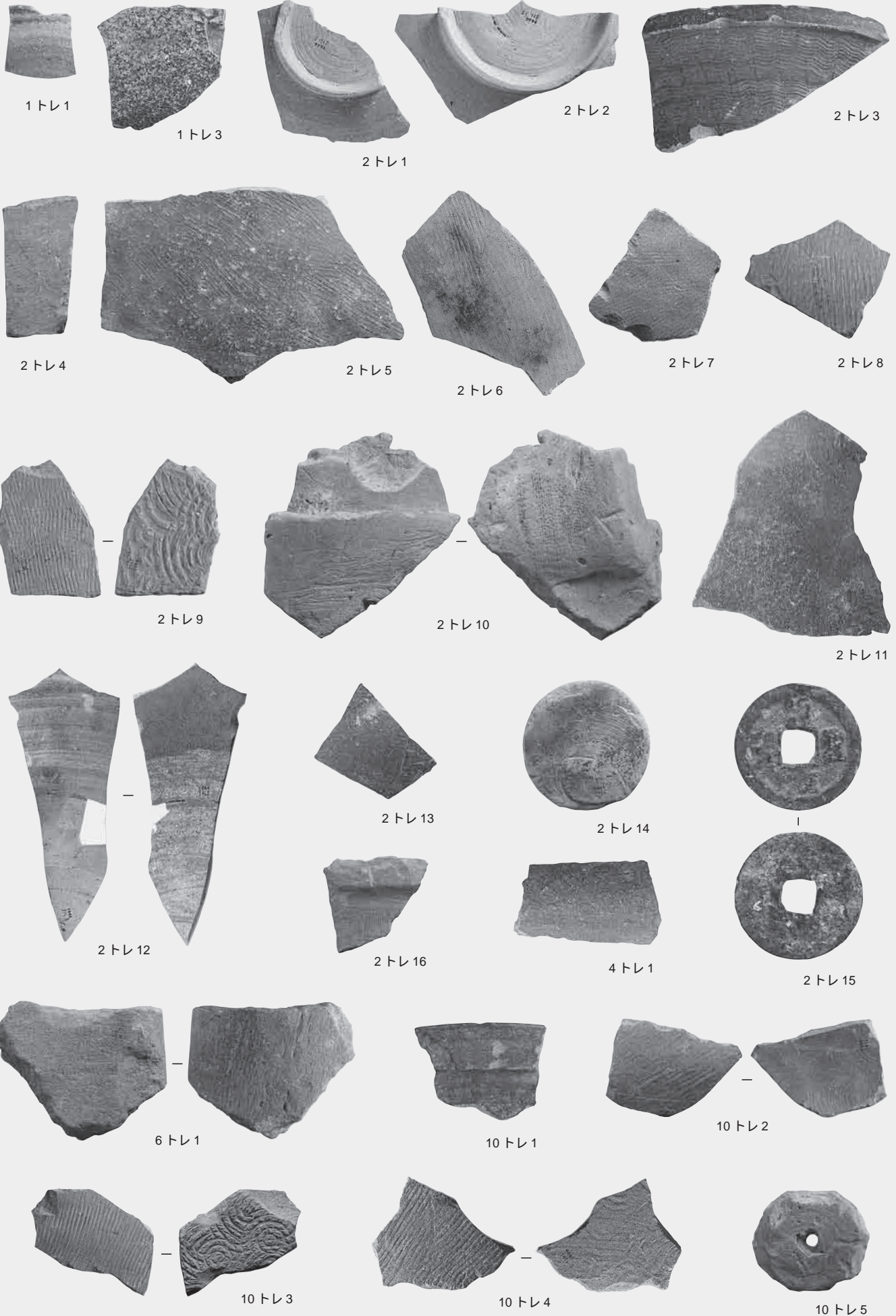
2トレ11



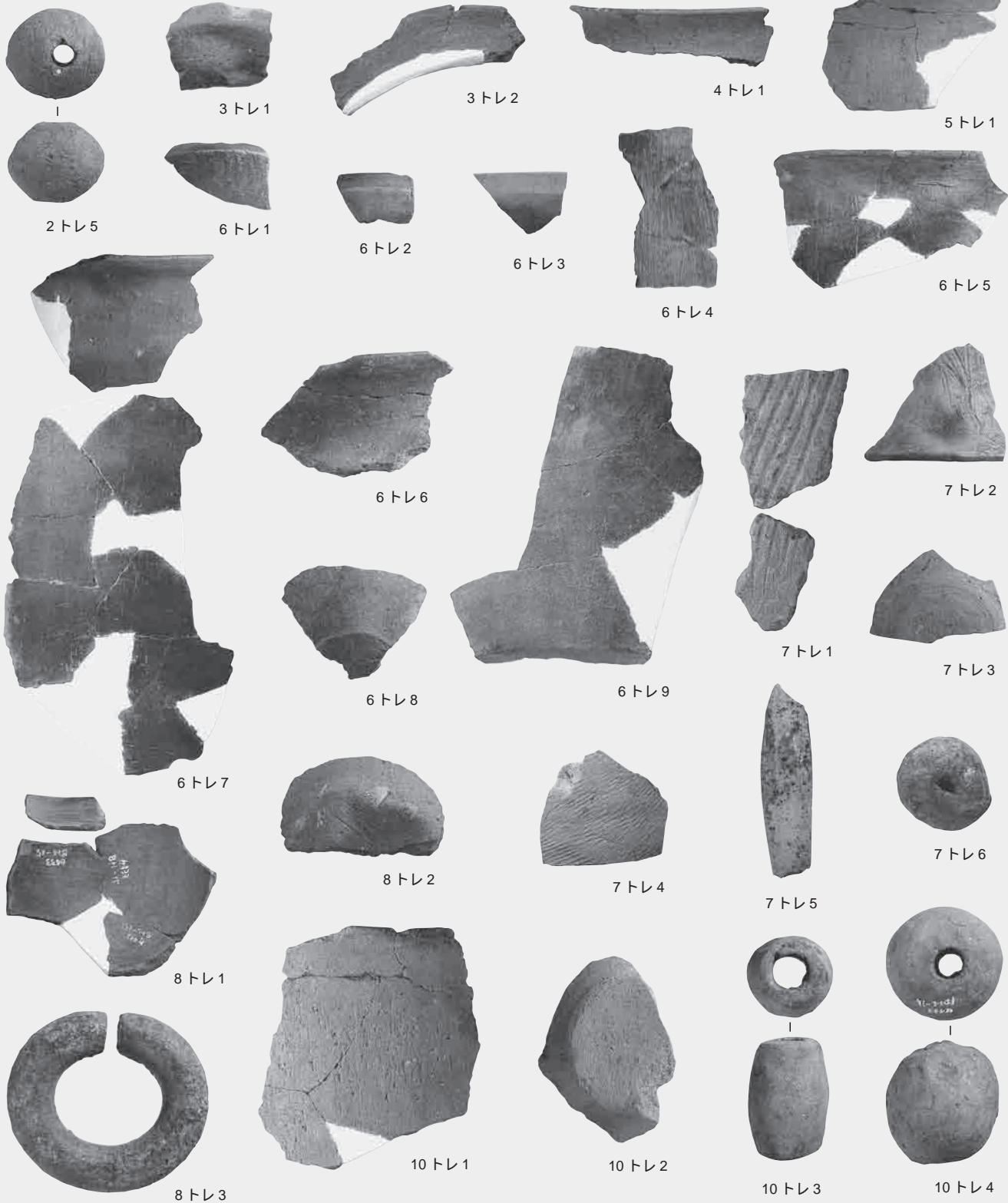
2トレ12



郡本遺跡群 (第11次)



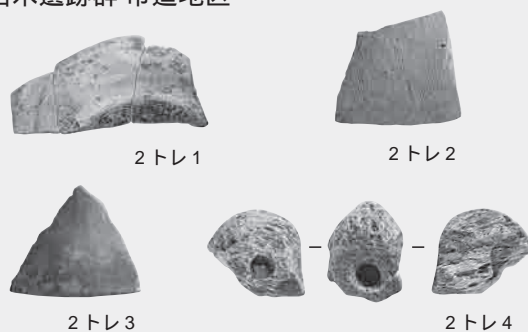
椎津向原遺跡



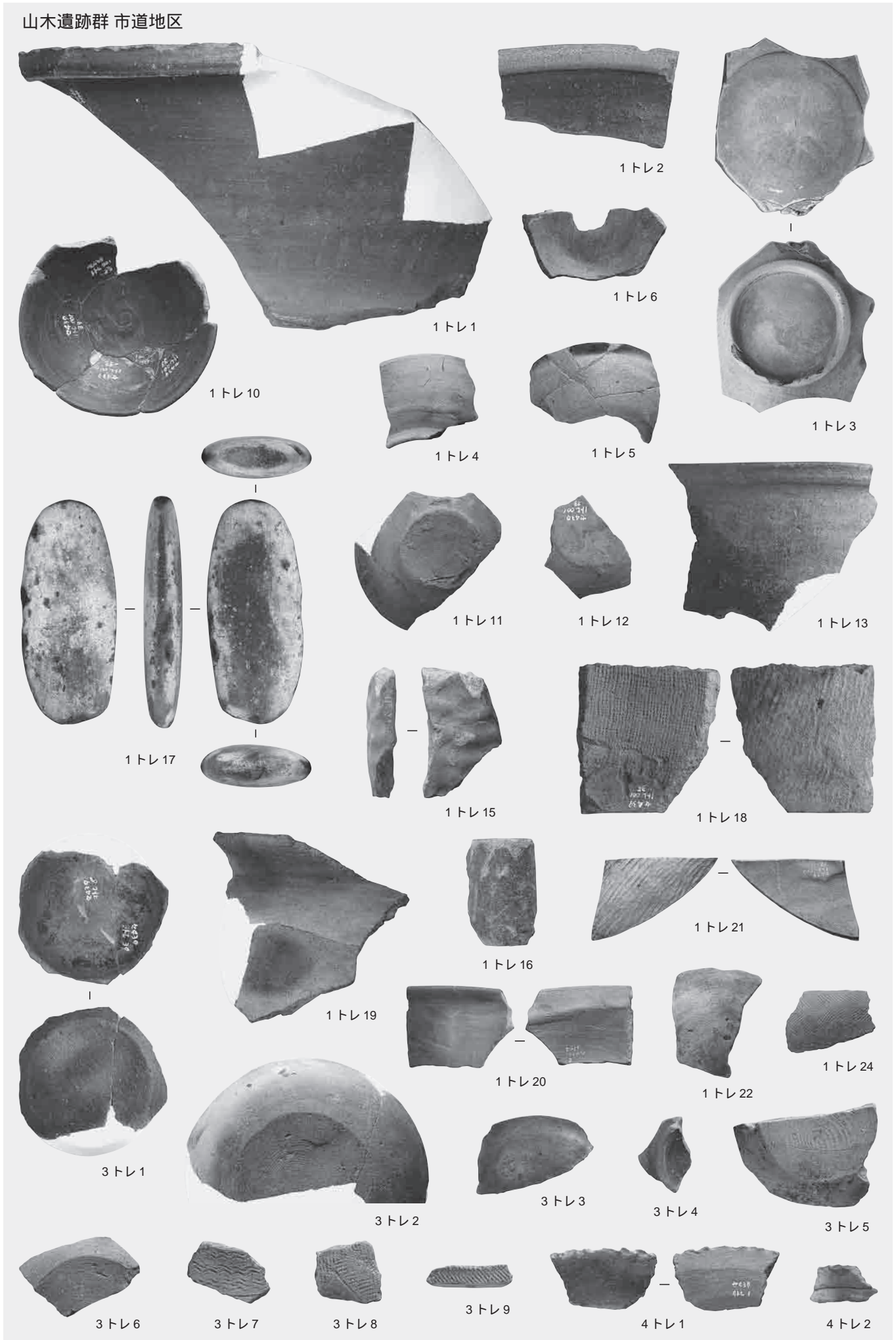
山新遺跡 (第5地点)



山木遺跡群 市道地区



山木遺跡群 市道地区



報告書抄録

ふりがな	へいせい20ねんどいちはらしなしいせきはっくつちようさほうこく
書名	平成20年度市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	郡本遺跡群(第8次・第10次・第11次)・椎津向原遺跡・山新遺跡(第5地点)・山木遺跡群市道地区
巻次	
シリーズ名	市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書
シリーズ番号	第11集
編著者名	牧野光隆・忍澤成視
編集機関	市原市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)9000
発行年月日	2009年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こおりもといせきぐん 郡本遺跡群 (第8次)	いちほらしこおりもと 市原市郡本1丁目126-1,127-1の各一部	12219	セ429	35° 30′ 44″	140° 07′ 13″	20071217 ～ 20071220	34㎡/341㎡ 確認調査	個人住宅建設
こおりもといせきぐん 郡本遺跡群 (第10次)	いちほらしこおりもと 市原市郡本2丁目230番6	12219	セ443	35° 30′ 49″	140° 07′ 35″	20081127 ～ 20081204	26㎡/253㎡ 確認調査	建売住宅建設
こおりもといせきぐん 郡本遺跡群 (第11次)	いちほらしこおりもと 市原市郡本2丁目389・396番	12219	セ444	35° 30′ 47″	140° 07′ 32″	20081205 ～ 20081225	79㎡/789.3㎡ 確認調査	集合住宅建設
しいづわかいはらいせき 椎津向原遺跡	いちほらししいづ 市原市椎津1007	12219	セ433	35° 28′ 03″	140° 02′ 02″	20080526 ～ 20080613	448㎡/4,477.44㎡ 確認調査	宅地造成
さんしんいせき 山新遺跡 (第5地点)	いちほらしあわぎあざに たご 市原市姉崎二太子1758	12219	セ438	35° 28′ 50″	140° 03′ 12″	20080722 ～ 20080725	27㎡/268.91㎡ 確認調査	個人住宅建設
やまきいせきぐん 山木遺跡群 市道地区	いちほらしやまきあざいちみち 市原市山木字市道1027番6	12219	セ439	35° 31′ 26″	140° 08′ 01″	20080729 ～ 20080804	29㎡/282.99㎡ 確認調査 7㎡ 本調査	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡本遺跡群 (第8次)	包蔵地	平安・中世	竪穴建物跡1軒、土坑1基	土師器、須恵器、中世陶器	平安時代の竪穴建物跡1軒を検出した。
郡本遺跡群 (第10次)	包蔵地	平安・中世	竪穴建物跡1軒、土坑2基、溝跡1条、掘立柱建物跡柱穴4基	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、中世陶器、石造物	平安時代の大型の溝跡を検出した。
郡本遺跡群 (第11次)	包蔵地	平安・中世	台地整形跡2カ所、井戸跡1基、溝跡1条、土坑1基	土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦、中世陶器、銭貨	中世に大規模に土を動かす台地整形工事を施していることが判明した。
椎津向原遺跡	包蔵地	古墳後期・平安	竪穴建物跡20軒、溝跡3条、土坑1基	土師器、須恵器、土錘、土玉、青銅製耳環	古墳時代後期の集落を確認した。
山新遺跡 (第5地点)	包蔵地	古墳・近世		土師器、円筒埴輪	姉崎二子塚古墳の周溝の外であることを確認した。
山木遺跡群 市道地区	包蔵地	弥生後期・古墳前期・平安	竪穴建物跡10軒、掘立柱建物跡1棟、土坑1基	弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦	遺構密度が高く掘立柱建物跡などが伴う平安時代の集落を検出した。

要約	<p>今年度は5遺跡を調査し、昨年度に調査し未整理であった郡本8次を入れて6遺跡を報告した。</p> <p>郡本遺跡群の各調査では、これまであまり注目されていなかった中世の遺構を確認した。特に11次調査における大規模な台地整形跡など、新たな様相が垣間見えた。一方、上総国府推定地として知られる時期としては、10次調査において平安時代の大型の溝跡を確認し、平成4年度の子甲2次調査で検出した大溝との関連性が注目される。</p> <p>椎津向原遺跡の確認調査では、近隣調査の五霊台遺跡や茶ノ木遺跡で顕著にみられた古墳時代後期の集落が、その南側の台地でもひろがることを確認した。山新遺跡第5地点では、姉崎二子塚古墳後円部墳丘目前の調査であったが、調査区は周溝の外側であることを確認した。山木遺跡群市道地区では、弥生時代後期～古墳時代前期の集落を確認したほか、本調査部分において平安時代の切りあう竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出し、緑釉陶器の段皿などが出土した。近隣の白船城跡の集落とともに、この地域の重要性を示唆する事例となった。</p>
----	---

平成20年度 市原市内遺跡発掘調査報告

平成21年 3月25日発行

編 集 市原市埋蔵文化財調査センター
市原市能満1489

発 行 千葉県市原市教育委員会
市原市国分寺台中央1-1-1

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南2丁目7番2号